

後編

【御言】

復帰原理

緒論

・復帰原理とは、墮落した人間に創造目的を完成せしめるために、創造本然の人間に復帰していく神様の摂理をいいます。

【感想】

ここでとても大切なことは、神様は墮落した私たち人間を決して放置はされないということなのです。神様の摂理は今も展開されており、万人の救済を願っておられるということです。ですので、私たちが創造本然の人間に復帰されるまで神様は予定論にあるように95%の責任を負われて、いつも準備されているということだと思います。

ですので、皆様はいかがでしょうか。自分で自由に勝手気ままに生きていると思っていなくても、いつしか、私たちの人生は神様の敷かれたレールに乗っているということなのです。しかも、幸福になるようなレールに乗っているということです。

では、なぜ、私たちは幸福になることができないのでしょうか。何ゆえ、不幸が襲ってくるのでしょうか。そこには、洗礼ヨハネがそうであったように、神様の摂理に対する無知というものが、レールから外れた方向に私たちを引っ張ってしまっているということなのです。

これがまさに総序でもあったように、本心と邪心の対立なのです。ここで確認すべきことは、私たちは創造目的を完成することを目的として人生を歩むべきであり、その創造目的を完成する為に神様はいつも準備をされているということだと思います。未だ未完成な私たちに与えられる責任分担とはまさに、そのような神様の復帰摂理が込められているということを私はよく感じています。

ですので、責任を果たせば、摂理は進み、その摂理は全体目的と個体目的がありますので、必然的に私たちも幸福になってゆくということです。ここに万人が必然的に幸福になれる理論が確立されているのです。皆様はいかがですか。毎日の生活に摂理を感じておられますでしょうか。

【御言】

・復帰摂理は、創造目的を再び成就するための再創造摂理であるので、原理によって摂理されなければなりません。それゆえに、これを復帰原理といいます。

【感想】

神様は無条件に秩序なく私たちを救うというようなことはされません。万人が救われると説明しましたが、それは一定の法則、秩序にのっとって成されるということです。そのような法則を熟知することは、神様もその法則を活用してその人を救うことができるのですが、そのような法則に無知であれば、神様も救いの手を差し伸べようがないということです。

これは、現代科学を考えれば、分かりやすいと思います。電気の法則などを熟知して、家電製品の使い方がちゃんと分かっているならば、私たちは電気を利用して、家電製品を豊かな、安楽な生活のために活用することができるようになります。ですが、マニュアルがなく、使い方も分からない家電製品がボンと置かれただけでは、ただのインテリアになるしかなく、かえって生活の邪魔になるかもしれません。そして、その家電製品を利用して得られる安楽な生活を手に入れることはできないというのは、皆様もお分かりになると思います。

私たちの人生においても、このような幸福になるためのマニュアルがなければ、闇雲に刹那的に生きるしかなく、そして、結局は苦痛と苦悩の生活に陥ってしまうということです。人間の無知とは、まさにこのような人生の無知を言うのであり、幸福になるなり方を失ってしまった不幸な存在だということです。

ですが、ここで紹介している原理を活用することができるようになれば、私たちは神様と共に喜びの人生を歩めるようになるということです。そして、神様の喜ばれる人生が、私たちの幸福な人生に直結していると私は思っています。

ですので、神様が人間を救われるにも原理原則に従って救われるということをここでは紹介しています。つまりは、原理とは神様と幸福な人生を送れることを可能にする、しかも万人に通用する理論なのです。ですので、原理は単なる宗教の教理ではなく、科学的でもあると言えるのではないのでしょうか。私もその原理を活用した生活を体恤すべく日々努力をしております。

【御言】

墮落人間の復帰と完成

- ・人間は長成期の完成級において墮落し、サタンの主管下におかれるようになりました。
- ・このような人間を復帰するためには、
 - ①サタン分立の路程を通して、アダムとエバが成長した基準、すなわち、長成期の完成級まで復帰した型を備えた基台の上で、
 - ②メシヤを迎え、重生することによって、原罪を取り除き、墮落以前の立場を復帰したのち、
 - ③メシヤに従って更に成長し、
 - ④創造目的を完成することができます。

【感想】

私たちは墮落の血統を受けて誕生していたのです。それであるがゆえに、私たちはサタンの主管下に置かれて人生を過ごすことしかできず、そのため、どんなに幸福を望んだとしても、不幸な人生を送らざるを得なかったということです。ですので、私たちは、知らず知らずのうちに、サタンの主管する地獄と呼ばれるところで人生を送っているということです。無知はそのような自覚すらも失わせることで、人間が本来の幸福を享受することを阻んでいるのです。

そのような私たちが創造本然の幸福な人生を送るためには、次のような道りを経てゆくということです。そのために必要なのがサタンを分立することなのです。私たちの心にはサタンの血統より受け継いだ邪心というものがあります。その邪心の発露を自覚し、そして、邪心の願うことを実践しないということを通じて、身体が悪を行わないようにすることを通じて、私たちは墮落性を脱ぐようになります。もちろん、サタンを分立するためには公式的な方法がありますので、それは後日、ご紹介することになります。

このようにサタンを分立しただけでは、既存の宗教と同じで、様々な修道生活を通じて、善を実践するという点は変わらないと思います。重要なのは次のステップで、メシヤを迎え、重生することなのです。すなわち、祝福を受けて、原罪を清算することが必要になるということなのです。ですので、幸福な生活のためには善行を積み重ねるだけではなく、真の御父母様から祝福を受けるという段階を通過しなければ、サタンが血統を理由に引っ張ってくるということです。そして、原罪を清算して終わりというわけではありません。つまり、祝福を受ければ全てが終わるということではありません。さらに御父母様に侍って成長し、私たちは創造理想を完成しなければならないということなのです。創造理想を完成することができれば、私たちは神様の直接主管圏に入り、神様と一体となり、神様の真の愛を実践して、幸福な人生を送れるようになっているということだと思います。

これは特定の個人に賦与される特権ではありません。万人が受けることのできる神様の恩恵なのです。ですので、私たちは祝福を受けることを、知人や友人に勧めるのです。なぜでしょうか。単なる版図の拡大のためではないのです。人を幸福にするからなのです。

このように私たちには、神様の摂理によって幸福になるための運勢的風とサタンの血統による不幸になるための運勢的風を受けていたので、どちらにも進めないというようなこともおきていたのです。私たちは幸福になれます。そして、万人が幸福になれるのが、この復帰原理の大きな恩恵だと私は思っています。

【御言】

蕩滅復帰原理

墮落人間の位置

- ・人間始祖が完成していたならば、神様のみに対して生活する立場におかれるはずでした。
- ・しかし、墮落してサタンと血縁関係を結んだので、墮落直後、アダムとエバは、神様とも、サタンとも対応することができる中間位置におかれるようになったために、
- ・彼自身が善なる条件を立てたときには天の側に、悪なる条件を立てたときにはサタンの側に分立されます。

【感想】

ここでは天の側、サタンの側と表現されていますが、私たちの生活の視点から見ると、天の側とは神様の理想とされる善の世界、悪の側とはサタンが願う地獄世界ということになると思います。つまり、私たちは天の側に分立されればより幸福になり、悪の側に分立されればより不幸に、苦痛と悲惨の生活になるということになると思います。ですので、教会の皆様は、より善なる世界に入るために様々な摂理を担われ、それに責任を持って実践をされ、そして、その実績が条件となっているのではないのでしょうか。

そのようなことを考えると、何もしないということは中間位置に留まることを意味するのです。ですが、神様は創造理想を実現されるために摂理されていますので、これは神様の願いに反することでもあり、したがって、何もしなければサタンが引っ張って行くというのです。

私たちは摂理を知ることによって、また責任を持つことによって、初めて、善なる条件を立てることがどういうことかを知るようになるのです。ですので、そのような善の条件という価値観が、この世とは少し異なるために誤解を招くこともあるかもしれませんが、私たちは自分だけが喜ぶという凡人的な価値観を、このような善の条件を学ぶことによって転換してきた者であり、その善を実践してきた者なのです。

摂理を知らなければ、人生とは何かの運命に翻弄される荒海のように見えるかもしれませんが、神様と摂理がはっきりとすると、はっきりと幸福になれる道筋が見えるのです。これは、何度も言いますが選ばれた特定の人に与えられる特権ではありません。万人が知りえる真理なのです。今、このブログを読まれている貴方も摂理を進めるようになれば、確実に幸福になってゆくのです。そして、その摂理の準備を知るとき、その準備をされる主体者であられる神様を理解できるようになると思います。原理は万人が幸福になれる普遍的理論です。ですので、この原理を科学と言っても差し支えないのではないかと私は思います。単なる信じる人だけが恩恵を受ける宗教のレベルを私は超えていると思っています。

【御言】

蕩滅復帰

- ・どのようなものであっても、本来の位置と状態を失ったとき、それらを復帰しようとすれば、そこに必要な何らかの条件を立てなければなりません。
- ・このような条件を立てることを「蕩滅」といいます。
- ・蕩滅条件はどの程度に立てなければならないのでしょうか。
- ・第一は、同一なる価値の蕩滅条件、第二は、より小さい価値の蕩滅条件、第三は、より大きい価値の蕩滅条件を立てる場合です。
- ・蕩滅条件を立てる方法は、墮落するようになった経路と反対の経路をたどる蕩滅条件を立てなければなりません。
- ・蕩滅条件は、人間の責任分担として、人間自身が立てなければなりません。

【感想】

ここで蕩滅復帰の内容が紹介されています。つまり、私たちが無条件で幸福になれない理由があるということです。神様は私たちを救おうと摂理されています。ですが、神様が人間が何ら努力などをすることなく救い出すというようなことをすることができないのが原理なのです。そのために必要なのが蕩滅条件なのです。

ただ、み旨の道において、蕩滅条件はほとんどがより小さい価値の蕩滅条件になっていますので、その恩恵と神様の愛情の前に私たちは感謝するばかりなのです。ですので、私たちは蕩滅を感謝すべきなのです。これは、病人を治療する医療行為のようなもので、人生において不幸になってしまった人間が、その人生を善なるものに戻すためのものだと思います。ですので、蕩滅がなければ私たちは永遠に墮落した末裔として、地獄で過ごすことしかできないというのが原状なのです。しかも、より小さな価値の蕩滅で許されるということですから、これは大きな恩恵であり、感謝すべきことでもあると思います。

ただ、ここでのポイントは、私たちの人生がなぜ不幸なものになったのかという経路を良く知らなければならぬということなのです。ここに闇雲にただ、周りの人の真似をして蕩滅条件を立てることが、的外れになることを示唆もしていると思います。自分の人生を振り返り、その人生においてどのような行為や言動が、自分を不幸に導き入れたのかということを明確に知った上で、それと反対の経路をたどるように条件を立てることが必要になるとここでは説明しています。性の問題で不幸になったのであれば、その性の営みにおいて何が間違っただのかを明確にして、そこで、間違っただけの経路と反対の経路を経なければならぬということです。つまり、お腹が痛いのに頭痛薬を飲んででもあまり意味がないように、蕩滅条件は不幸になった経路に応じて、個人差が現れるということだと思います。もちろん、原罪という人類共通の原因はありますが、遺伝的な罪や連帯的な罪は地域や家系において異なってきますので、私たちは家系図を解くことをとても貴重視するのです。

そして、最後のポイントは忘れないで下さい。蕩滅条件は誰かが代理で立てることができるものではありません。不幸になった私たち自身が、人間の責任分担として立てなければならぬということなのです。ですので、み旨の道に来て蕩滅を嫌がる人は、なかなか幸福になれないということなのです。蕩滅条件を立てることが苦痛なので、蕩滅と言うと苦労するので不幸だと短絡的に考えるかもしれませんが、それは大きな誤りです。きちんと蕩滅条件が成立すれば、私たちはより幸福な人生を歩むことができるようになっていきます。決してより不幸になるようなことはありません。イエス様は人類の罪を背負われて十字架に架けられた。ですが、イエス様を信じると言う蕩滅条件を立てなければ、その恩恵は私たちとは関係がないということです。

ですので、私たち家庭連合員の人生はとても苦労が多いように見えるかもしれませんが、それは人生の幸福の階段をものすごい勢いで登っているためなので、決して不幸に落ちていることではないのです。清平役事もそうだと思います。先祖において殺しあったようなことがあったとしても、後孫の私たちが僅かな蕩滅条件をもって、そのようなご先祖様を解怨してさし上げて、絶対善霊へと生み変えてさし上げることができるのです。ですが、そのような蕩滅条件を立てなければ、そのような恩恵は私たちとは関係がなくなるのです。ですので、統一勇士というのは、勇猛果敢に蕩滅条件を立てることにチャレンジする群れだったのです。今はもっと時代的な恩恵がありますが、どこまでも私たちの責任分担は私たちで果たさなければなりません。その結果が不幸に繋がることなく、幸福に繋がるというのがみ旨の素晴らしいところだと私は思っています。

【御言】

メシヤのための基台

- ・墮落人間がメシヤを迎えるためには、「メシヤのための基台」を造成しなければなりません。
- ・墮落人間が「メシヤのための基台」を造成するためには、まずアダムが、どのような経路によって創造目的を成就し得なくなったのかということを、知らなければなりません。なぜなら蕩滅条件は、

墮落と反対の経路をたどって立てなければならないからです。

・第一に、「信仰基台」は、アダムが神様のみ言を守りながら、成長期間を経なければならなかったのです。

・第二に、「実体基台」は、アダムが「信仰基台」の上で神様と一体となり、み言の「完成実体」となることにより、個性完成者となることでした。

・「信仰基台」と「実体基台」を立てることによって成就される「メシヤのための基台」の上で、メシヤを通して原罪を取り除かなければ「完成実体」となることはできません。

【感想】

私たちが御父母様と出会うにおいても正しく出会うということがあるのです。単なる偶然や、会いたいという願望だけで会えるお方が御父母様ではないというのです。御父母様というメシヤを迎えるためには、原理的な手続が必要なのです。その準備として必要なのがメシヤのための基台なのです。では、そのメシヤのための基台とはどういうものなのでしょう。

信仰基台とは神様の御言を守り実践することです。私たちは毎日訓読会をしています、その訓読会を通じて、神様の御言を守り、実践することを決意するのです。ですので、訓読会は読むだけで終わるのではなく、読んでから自分のすべきことを悟り、さらにその読んだ御言にしたがって実践するということが重要になるのです。ですので、私たちは御言を読むだけではなく、体恤することを目指しています。

次に、実体基台とは、毎日御言を実践してゆくと、徐々に神様の願われた姿を得るようになってゆきます。つまり、創造本性を復帰し始めるということです。それは、同時に、原理とは反対の地獄の習慣に染まって生きてきた墮落性が消えてゆくことを意味します。そのことを証明してもらうためのサインをしてもらうのが、墮落性を脱ぐための蕩滅条件なのです。ですので、墮落性を脱ぐということは、非原理の習慣性を否定することのように思われるかもしれませんが、それはどこまでも御言を実践した土台があってこそだということです。御言を実践して、自らの墮落性が消えてゆけば、自然と墮落性を脱ぐための蕩滅条件は成立するのです。ですので、難行苦行を蕩滅条件のように思われるかもしれませんが、そのような苦労も、御言を実践して体恤するという土台があってこそ、実るということだと私は思っています。

そして、最後のポイントを忘れないようにしています。どのような宗教でも良いように思う人もいるかもしれませんが、人間が創造理想を完成するためには、メシヤを通じて原罪を取り除かなければ不可能だということです。ここに御父母様でなければならないという理由があります。

【御言】

墮落人間の創造目的成就

・墮落人間が創造目的を成就し得る基準を復帰するためには、まず、人間始祖が立てることのできなかった、「信仰基台」を蕩滅復帰するための「中心人物」がいなければならず、「条件物」と「数理的な蕩滅期間」を立てなければなりません。

・「実体基台」を立てるためには、「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」を立てなければなりません。

【感想】

ここでは信仰基台と実体基台を造成するための方法が簡単に説明されています。信仰基台においては、誰しもが条件を立てる本人が中心人物になります。一見、個々人が立てる条件なのに、何ゆえ中心人物と言われるのかと思われるかもしれませんが、私たちの一人一人は氏族圏を代表してこの道に来ているということです。ですので、その代表として氏族の中心人物になっているということがほとんどだと思います。そして、条件物として、今の時代は御父母様の御言が顕現していますので、御言を訓読し、また、御言を守り実践することになると思います。そして、とても重要なのがこの信仰基台は瞬間的に成就されるものではないということなのです。世の中にも「継続は力な

り」という言葉もありますが、御言の実践が自分の習慣として体恤されるためには、ある期間、繰り返し御言を実践するということを行わなければならないのです。私たちは瞬間的にできたことを習慣化して体恤したとは言いません。ある程度、何度も繰り返しながら、自然と意識しなくても御言の実践できるような習慣性を獲得することで、体恤したと言えると思います。それであるがゆえに、信仰基台は瞬間で立てることはできないということなのです。これは、とても人生を考えさせられます。信仰の勝利とは瞬間では決定されないということだと思います。もちろん、瞬間が摂理を分けるようなこともあります、そこに至るまでの時間というものがいかに重要かということを忘れてはならないと思います。

そして、実体基台においては、習慣化し、体恤した御言を人間関係に活用することを意味していると思います。私たちが御言を実践して、創造本性を発露し、実践できたとするならば、私たちは完成実体に近づくことになります。ところが、体恤した習慣を無視して、体恤した習慣とは異なるこれまでの生活的な現実的、非原理的な習慣に従って言動を行えば、それは創造本性を発露したとは言えず、逆にサタン世界で培った習慣性である墮落性を発露したと言うほかはないのではないでしょうか。そのような言動を自らの信仰で抑止し、御言の実践で復帰した本性を発露することが墮落性を脱ぐ基本になると思います。ですので、外見的に全く同じ言動だったとしても、真の愛を動機としていけば、それは愛の表現であり、愛の実践になります。ところが憎しみを動機としてすれば、それはサタン世界の習慣的言動となり、墮落性を誘発したと言っても過言ではありません。ですので、私たちは献金をするにおいても、御父母様を慕い、愛する心情で捧げるのであって、税金の徴収のように、しぶしぶ、嫌々ながら捧げるのとでは、その実りにおいて天地の開きが生じるということです。なぜでしょうか。その献金の行為が創造本性を発露しているのか、墮落性を繰り返しているのかといことで、実体基台の造成が異なってくるからなのです。

【御言】

第1章 復帰基台摂理時代

アダムの家庭を中心とする復帰摂理

・アダムの家庭が「信仰基台」と「実体基台」とを復帰する蕩滅条件を立てて、それによって成される「メシヤのための基台」の上でメシヤを迎えるのでなければ、復帰摂理は成就できません。

【感想】

ここでアダム家庭の摂理が紹介されています。さて、アダム家庭をなぜ学ぶのでしょうか？ それは私たちにも関係があるからなのです。アダム家庭の血統を引き継いで私たちは生まれているために、アダム家庭で起こった出来事が現代においても繰り返されることが多々あるということです。そして、同じような場面に遭遇していたとしても、私たちが原理を知らなければ、アダム家庭と同じ失敗を繰り返し、サタンの主管下に引かれていくということです。

アダム家庭の時代には、神様から完全に離れてしまっていたために、神様の御言を完全に失い、その御言を聞くこともできない状態だったということです。そのようなアダム家庭において、創造本性を復帰するためには、御言を実践する代わりに、供え物という万物を神様に捧げることを実践するのです。

これは、私たちの信仰生活においても生かされています。私たちは、御父母様の御言を聞いても、理解できない、悟り得ないというような状況が多々あるとしても、その不足さを補うために、万物として経済を捧げ、それを条件として、創造本性を復帰することができるようになっているのです。ですので、経済で大きく貢献したゲストが一気に御言を受け入れ、理解するようになるという事例は本当にたくさんあります。

と、同時に、私たちは、献金という経済を捧げた土台の上に、御父母様から御言を賜り、万物によって復帰された心霊によって、もっと御父母様の御言を学び、実践するという努力が必要になると私は思います。私も、復帰された初期の頃は、御父母様の御言や原理が本当に難しく、理解

できずに、悟りえず、ただ棒読みをしていた時期もありました。ですが、そのような中で、献金摂理に同参することを通して、万物を神様の前に捧げることによって、それが蕩減条件となり、徐々に心霊が明るくなり、御言を理解することができるようになったという経緯があります。

ですので、私たちはただ、経済摂理を担うばかりではなく、献金した条件を土台として、もっと御言を訓読して理解し、実践する努力を怠ってはならないということを肝に銘じています。次回にはアダム家庭における信仰基台と実体基台とはどういうものかということも紹介されます。

では、皆様における教会生活において、信仰基台と実体基台はしっかりと見えていますか？ ただ、言われるままに従うのではなく、どのような摂理が進められていて、どのような信仰基台と実体基台を準備しようとしているのかを明確にすることは、私たちの信仰生活においてとても重要なことだと思います。

【御言】

信仰基台

- ・「信仰基台」を復帰するためには、第一に、御言の代わりの条件物がなければならず、それが供え物だったのです。
- ・第二に、その基台を復帰できる中心人物がいなければなりません。聖書の記録を見ると、アダムが供え物をささげたとは書かれておらず、カインとアベルのときから供え物をささげたとなっています。
- ・その理由は善悪二つの性稟の母体となったアダムの代わりに、彼の二人の子を、各々、カインは悪の表示体として、アベルは善の表示体として、分立されたのち、神様かサタンかの一方だけを各々対応することのできる立場に立ててから、供え物をささげるように仕向けられたのです。
- ・アベルが神様のみ意にかなうように供え物をささげたので、「信仰基台」がつくられました。

【感想】

ここではアダム家庭において立てられるべき信仰基台について紹介されています。そして、一つのポイントは御言を実践するのが信仰基台の基本であるにもかかわらず、アダム家庭においては御言を受けることができる状態ではなかったということです。ですので、その代わりに供え物を捧げるようにされたということなのです。ですので、人間の成長過程において、まず万物を捧げる路程を通じて、心霊を成長させ、それから御言を受けて、御言を実践するという流れになるということは皆様もお分かりになると思います。

そして、この供え物を捧げるにおいても、神様のみ意にかなうように捧げなければ「信仰基台」はつくられないし、アベルとしての位置も確立できないということなのです。ですので、経済路程において献金するにおいても、その捧げ方があるということです。なぜならアダム家庭において、カインも供え物をしたからなのです。献金を捧げるにおいては、自分がアベルにもカインにもなり得るということです。もちろん、善の側に分立されるのは、神様のみ意にかなった捧げ方をしたときであるのは明確であり、その捧げ方というものを私たちは教会を通じて学び、実践するのです。

教会の中心者というアベルの方々には、このように神様のみ意を知らされ、その願いを果たすために、様々なものを捧げられてるので、それをもってアベルとして位置を確立されているのです。そのようにして、信仰基台を造成してくださっているのです。その土台において、私たちカインは墮落性を脱ぐための蕩減条件を立てて、その中心者であるアベルの方と一体化すれば、メシヤのための基台が復帰されるようになっていきます。ですので、カインの立場の信仰のポイントは中心性と一体化となると思います。

私たちは教会に通うのであれば、アベルという方々は、私たちの知らないところで信仰基台を造成すべく様々な精誠を捧げられていることを知っておくべきであり、その基台があるがゆえに、私たちカインは実体基台を用意するだけでメシヤを迎える準備が整うようになっていきます。ですから、アベルを外見的、人間的にだけ見ると、摂理を見失うこともあるので、十分に気をつけなければな

らないと思います。

【御言】

実体基台

・アダム家庭に「実体基台」がつくられるためには、カインがアベルに従順屈服し「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」を立てることにより、神様がその献祭を喜んで受け得るべきでした。

【感想】

ここで大切なのは、神様はカインの供え物を受け取りたいと思っておられたということです。カインは嫌いだから何を供えても受け取らないというような神様ではないのです。神様はカインの精誠も受け取りたかったのです。これが親なる神様の重要なポイントだと思います。ただ、問題は、カインが直接神様に供えてしまったというのが問題だったということです。きちんとカインが墮落性を脱ぐための蕩滅条件を立てて、アベルを通して、供え物をすれば、神様は喜んでカインの供え物を受け取られたということなのです。

このことは、私たちと御父母様との関係においても言えることなのです。私たちは御父母様が大好きです。そのような私たちが集まると、自然とアベルとカインに分かれてきます。ですが、自分がカインだからといって、御父母様が愛していないというようなことは決してありません。ただ、御父母様はアベルを通じて、カインの精誠を受け取ろうとされるということなのです。ですので、御父母様に何かを捧げたいときには、最寄の教会の教会長様を通すということです。御父母様に何かを伝えたいときも、直接伝えるのではなく、アベルを通して伝えるということなのです。

もちろん、真の御父母様は私たちの普段の祈りを霊的に聞かれていますと思います。そのような報告を聞かれながら、様々な責任を果たした実績はアベルを通して届けなさいと指導されるのです。ですので、皆さんの精誠を漏らさず神様に届けたいアベルは、何をしているのか報連相をしっかりとしてくださいといわれるのです。それは、カインの皆様の精誠を神様がきちんと受け取ることができるように手続が必要なことを分かっておられるからなのです。よく、アベルカインは問題になるといいますが、サタンはこのようにアベルへの道を封じて、カイン圏の精誠を神様に届けまいと働くのです。皆様もご注意下さい。

【御言】

墮落性を脱ぐための蕩滅条件

カインが

- ① アベルを愛して
- ② アベルを仲保として
- ③ アベルに従順に屈伏して、彼の主管を受け
- ④ アベルから善のみ言を受けて善を繁殖しなければならない

・墮落人間が墮落性を脱ぐためには、墮落するようになった経路と反対の経路をたどらなければならない。

【感想】

墮落性を脱ぐための蕩滅条件はここでも紹介するように墮落するようになった反対の経路で立てなければなりません。まず、カインはアベルを神様と同じ親の目で見れずに、神様から愛されないことを恨みました。したがって、それを蕩滅するためには、カインは神様の愛するアベルを愛して、神様の愛の主管する主管圏に戻るべきだったのです。カインがアベルを愛し、アベルがカインを愛すれば、その愛の授受作用は両者を一体化させ、カインの供え物はアベルの供え物と同一になるのです。そうなれば、カインは供え物を神様に受け取ってもらえるということになり、また、神様の真の愛の主管圏はアベル圏のみならず、アベルと一体となったカイン圏にまで広がるのです。

次にアベルを仲保とすることです。つまり、神様はカインの直接の精誠を受けることができないということです。これは御父母様も同じです。どんなに必死に私たちが御父母様の為に精誠を捧げたとしても、目の前にいるアベルを通さずしては、御父母様もその精誠を受け取ることができないのです。ここで、誤解していけないのは、神様や御父母様はカインを憎んで供え物を受け取りたくないということではないということです。神様も御父母様もカインを子女として愛しておられ、その精誠を何とか受け取りたいと願っておられるのです。子供が親の為に精誠を尽くすのに、それを嫌がる親はいません。ただ、原理的な手順を踏まないと受け取れないということです。もちろん、アベルはカインの神様や御父母様に捧げる精誠を神様につなげなければなりません。あたかも自分の実績だとカインの精誠の上に立てられた栄光を在自するとアベルとしての位置を失うということです。

そして、次に、カインはアベルの主管を受けることなのです。先に、アベルはカインを愛するというのが必要なことは紹介しましたが、その愛の主管をカインは受けるべきなのです。ですが、これまでカインは自分が害されるのではというような不安から、逆にアベルを主管してしまおうというようなことが何度もあったということです。そこにはアベルの愛情を信じることのできないカインの悲しい背景があったのです。もちろん、ここでも、アベルはカインを復帰した真の愛で愛さなければなりません。カイン圏に無関心であったり、カインを憎むようなことをしては、メシヤのための基台が立つことはありません。ましてや、そのようなアベルに対して、カインは主管を受けようとはしません。

最後に、アベルは神様から様々なみ言を受けて創造本性を復帰していますが、カインはそのようなアベルと一体化して、アベルの神性を繁殖しなければならないということです。間違っただけなのは、アベルと一体化することを強調するあまり、アベルの墮落性を繁殖するようなことをしては基台にはならないということです。ここでもあるように、神様や中心から受けた善のみ言を繁殖するのです。アベルがこの世的に持っている非原理的な習慣性を真似しろとは決して書いていません。ですので、私たちは中心者、アベルの復帰されている神性を発見しなければならないのです。もちろん、中心者は神様からみ言を受けていますので、そのみ言を受け入れ信じるというのも大きなポイントになると思います。このようにアベルはカイン圏に対して、善を施さなければならないのです。カインを憎んだり、カインに害を及ぼすようなことをするとするならば、そこには絶対服従の土台が崩れるということです。アベルは神様のみ言を受け、神様の願いを果たすために、そのみ言を伝え、指示するという前提があつてこそ、それに服従することが善になり得るのです。ですので、家庭盟誓においても絶対服従の前に絶対信仰と絶対愛が先だつのだと私は思っています。

このようにして、私たちカイン圏は墮落性を脱ぐだけで、メシアに出会えるようになっています。なぜでしょうか。それは愛すべきアベルが神様の前に精誠を捧げ、信仰基台を築いてくださっているからなのです。私たちがカインの立場に立つと往々にしてそのような苦勞が見えないことがあります。中心性と一体化はまさにカインの為に与えられた言葉なのです。アベルはカインを愛するだけでなく、信仰基台も復帰しなければなりません。それは伝道対象者を持って、アベルの位置に立って初めて分かることかもしれません。

【御言】

実体基台

- ・ところで、カインがアベルを殺害することによって、天使長が人間を墮落せしめた墮落性本性を反復するようになり、アダムの家庭の「実体基台」は立てられなかった。
- ・したがって、アダムの家庭を中心とする復帰摂理は成し遂げられなかった。

【感想】

ここでは、カインが実体基台を勝利できないとどのような悲劇が起こるのかということが明確に表現されています。この失敗はアダム家庭に限ったことではありません。私たちの信仰生活においても起こりえることなのです。皆様の前にいる中心者との関係において、愛情関係がスムーズに授受作用できていないと、サタンが門口に待っているのです。神側の授受作用がギクシャクすると、人

間は中間位置にいますので、必然的にサタンが引っ張る力が強くなるということです。そして、サタンの願いを果たす方向に動くのです。それがアダム家庭においてはカインによるアベルの殺害という摂理の破綻でした。

どうでしょう。教会において殺人を犯せばもちろん、これは警察沙汰になり、日本の法律で罰せられ、刑務所にも行くことにもなりますので、必然的にブレーキが掛かると思います。ですが、それ以前の段階として、アベルの妨害をする、アベルの足を引っ張る、アベルに十字架を背負わせるといようなことをしかねないということです。アベルに心情的な十字架を背負わせたとしても、日本の法律では裁かれないかもしれません。ですが、これは天の摂理から見ればあきらかに延長を意味しており、その時点で私たちカインは大きな負債を抱えることになるのです。

アベルと呼ばれる中心者も人間ですので、完全無欠ではないと思います。そのような中心者の欠点を探し回って、見つけるやそれをあたかも中心者の全人格のように語り広めることは、まさに創造本性ではなく、神側の欠点を探し回っているサタンそのもののなのです。

では、私たちカインはどうすべきなのでしょう。それは墮落性を脱ぐことにつきます。その方法を先日の内容で明確に紹介しているのです。中心者を愛すること、神様への精誠を中心者を通すこと、そして、中心者の真の愛の主管を受けること、そして、中心者の神性を探し出して、それを繁殖し、広げること。どうでしょう。皆様はできていますでしょうか。所属する教会の教会長様ご夫妻を愛しておられますか。摂理摂理と追われて無関心になっているようなことはありませんか。

私たちは何よりもアベルを愛すべきなのです。いえ、もし、み言を実践し、本性を復帰してきているなら、愛さざるを得ないというような境地にまで入ります。というより、自然と愛せるようになります。それを妨げているのが墮落性なのです。アベルを愛しましょう。これがカインの信仰のポイントになります。そこに地位や名誉、学歴や経済的富者などはありません。なぜなら愛情の問題だからなのです。

ですので、私たちは御父母様を愛することを学ぶのです。そして、アベルを愛することを学ぶのです。ですが、学ぶことと実践することは違います。蕩滅が掛かるとアベルを愛することが困難に思えることもあるかもしれません。でも、そのような姿も神様はずっと御覧になっているのです。帰っておいでと手を差し伸べながら。私はそう思います。

【御言】

ノアの家庭を中心とする復帰摂理

信仰基台

- ・「信仰基台」を復帰すべき中心人物はノアでした。
- ・条件物は、新天宙を象徴する箱舟であり、
- ・40 日間の洪水審判によって、
- ・箱舟を神様のみ意にかなるようにささげ、「信仰基台」を蕩滅復帰しました。

【感想】

ノアの信仰は私たちに様々な教訓を与えてくれています。まず、ノアは神様の啓示に対して忠実であったということではないでしょうか。私たちにしてみれば、それは御父母様の指示に忠実であることがあげられると思います。神様は山の頂に箱舟を造りなさいと言われたのです。当時の人の常識では考えられないことなのです。海ならまだしも山の頂上に造るのですから。ですが、真のお父様の指示にはそのような側面が往々にしてありました。真のお父様の指示には常識では考えられないようなものが多く、信者の間でもなかなか信じれないことが多かったのですが、いざ、洪水が来てみると、つまり、時が到来すると、その真のお父様の先見性に驚かされるということが本当に多々あったということです。

ですので、私たちの信仰の道においても、普段の日常生活では考えられないような摂理が訪れることがあるということです。それは得てして、常識というものが通用しないような指示もあるというの

です。そこで、常識に捕らわれると、ノアをあざ笑った人々のように洪水で審判されてしまうというようなこともあるということです。ですので、時として、メシヤの出される指示とは私たちの常識では判断できないことがあるがゆえに、絶対服従ということが強調されるのです。

この世的な常識とは人間が知りえた内容です。ですが、墮落論でもあるように無知に陥った人間が得た知恵なので、もちろん完全ではありません。それに対して神様は全知なのです。その違いなのです。ですので、全知の神様からくる啓示的な指示には人間の常識では測れないような内容もあるということです。

例えば、霊界における知識においても、地上にいる人間は宗教を通じて、その存在はあいまいではありますが、わずかに感知するのみかもしれません。ですが、御父母様の霊界に対する知識は、神様と一体となられることによって、完全なものになっていたのです。存在するかどうかの議論をするようなレベルではないということです。その霊界を意識して、指示をされたので、地上の人間として考えもつかないようなこともされたということです。

私たちの摂理においても、同じようなことがあるかもしれません。今、自分のしていることが、世界の復帰にどのように関わっているのかということが明確でないかもしれません。ですが、絶対信仰で従ってゆく中で、時が到来したとき、本当に精誠を捧げていて良かったと安堵することが、やはり往々にしてあるということです。

私たちは知識を持っていることに傲慢になってはならないということだと思います。全知の神様に比べれば私たちは知らないことのほうがはるかに多いのです。ですので、無知の自覚というのが人間を成長させるのです。そして、自分の判断というものが、自分の得た小さな知識に基を置いているとするならば、より適切な判断を神様に願うことは自然なことだと思います。

ですので、メシヤの判断や決定を、自分の小さな知識で測ったり批判することは、時として判断を誤ることにもつながります。ですので、私たちは祈って決めるということを習慣化しているのです。私たちはどんなに高等教育を受けたと言っても、得た知識や技術はちっぽけなものです。なぜなら神様は全知全能だからです。ですが、卑下することはありません。神様はそのような私たちをいつも愛しながら、助けようとされているのですから。皆様は神様の助けは必要ありませんか？

【御言】

実体基台

・「実体献祭」を捧げるためには、まず、「実体献祭」の中心となるべきハムが、アベルの立場を、復帰しなければなりませんでした。

・そのためには、ハムが「象徴献祭」に成功したノアと、心情的に一体不可分の立場に立たなければなりませんでした。

【感想】

よく私たちは信仰の路程において中心性と一体化ということを学びます。これは、アベルカインの蕩滅条件でも学びましたが、もう一つの意味合いがあります。真の御父母様が父母として、完全に勝利されたのですが、父母という位置において、アベルに当たるのは真の御子女様になります。そして、カインの立場が私たち祝福家庭にあたるとするならば、アベルは真の御父母様と心情的に一体不可分の関係を築かなければ勝利圏を相続できないということが起こるのです。

ですが、それが失敗したのがこのノア家庭の洪水審判後の出来事なのです。ですが、ここで失敗例だけをあげては、どうすればいいのか見えてきませんので、その成功例として挙げられるのも聖書では登場しています。それが、後に紹介するアブラハムとイサクの心情一体化だと思います。

御父母様は完全に勝利されました。ですが、その勝利を私たちが相続するにおいては、御父母様と心情的に一体不可分であることを示さなければならないのです。そのために、試練が訪れることがあるということです。御父母様が裸で寝ておられるようなことはないかもしれません。ですが、一般常識では明らかにマナーに反するようなことをされることもあるかもしれません。人間的に見れば

配慮が欠けていると思われるようなことが、私たちの目には見えるかもしれません。その時こそ、このハムの過ちが繰り返されるときなのです。これは真のご家庭においてもそうなのです。真の御子女様と言えども、単に血統的に繋がっているからと言って、御父母様の勝利圏を相続できるというわけではないのです。真の御父母様と心情的に一体不可分の試練を勝利して、認定された御子女様が御父母様の勝利圏を相続されるということを意味するのではないのでしょうか。

私たちは、よくアベルカインの関係において、つまづくという言葉を目にします。そのような時、私たちはアベルとは決して一体化しているとはいえないでしょう。それは何を意味するのかというと、自分つまづいているアベルの勝利圏を相続することができませんとサタンの前に提示していることと同じなのです。アベルの勝利圏を相続できないということは神様の版図が広がらないことを意味し、それは同時にサタンの主管圏が縮小しないことを意味します。これは、善でしょうか。少し考えれば明確に悪だと分かります。

真のお母様が女性だから従えないとか、そのような外見的なことを理由に心情一体不可分の提示を拒むとするならば、そのような人は御父母様の勝利圏を相続することはできないでしょう。では、どうすべきなのでしょう。後に紹介しますが、イサクのように、自分の大切なものを神様の前に捧げつつ、その大切なものよりももっと神様と御父母様を愛していることを示す時があるということです。そこに心情的な一体不可分の試練があると同時に、その試練に果敢に勝利してきたのがかつてのクリスチャンであり、現代においては私たちなのではないのでしょうか。

御父母様はまったく愛の方でした。子女である私たちのそのような試練が訪れるのを回避される為に、大きな条件を立てられて真のお父様は聖和されました。その愛を知らずに、いまだに御父母様と一体化することを拒むとするならば、それは親不孝という言葉で表現されるのではないのでしょうか。

皆様もハムにならないようにお気をつけ下さい。摂理を自分の狭い視野で評価すると、全体的な価値が見えなくなることがあります。御父母様の指示とはそれほどまでに重いのです。私たちは更なる成長が願われています。御父母様を何よりも愛する。それが親孝行であり、一体化のポイントのように思います。

【御言】

ノアとハムの心情一体の為の摂理

- ・創世記 9 章 20 節～26 節に、ハムはノアが天幕の中で裸になって寝ているのを発見し、恥ずかしく思って、彼の兄弟セムとヤペテを扇動しました。
- ・アダムとエバが墮落したのち、恥ずかしく思って下部を覆い、隠れた行動と同様に、ハムがその父親の裸体を見て恥ずかしがった行動は、サタンが侵入できる条件が成立し、その行動は犯罪となりました。
- ・このようにして、ハムは「実体献祭」をするためのアベルの立場を蕩滅復帰できなかったのも、
- ・「実体基台」をつくることもできず、ノアの家庭を中心とする復帰摂理も無為に帰しました。

【感想】

ここでは単にハムが父親のノアの裸体を恥ずかしがったことが、サタンの侵入条件となったことを示していますが、この時点で明確にハムの中にはノアはノア、自分は自分という心情的な分離があったことを物語っており、そのことをサタンの前に提示したことにより、サタンはノアの勝利圏をハムに相続することを拒める条件となってしまうのではないのでしょうか。

では、一体化していたらどうだったのでしょうか。確かに裸だと風邪をひくかもしれませんが、何か毛布のようなものをかけてあげたかもしれません。ですが、そのことを恥として、兄弟姉妹を扇動することはなかったでしょう。ハムは兄弟を扇動することで、自分だけではなく、兄弟のノアとの心情一体化の摂理まで破綻させてしまったのです。罪の繁殖とはこのようなことだと思います。

ですので、否定的な思い、批判的な思いがわいてきたとき、神様に祈り求めるべきだと思います。

間違っ、その批判的な思いを兄弟姉妹に繁殖してしまった場合には、墮落性本性における罪の繁殖を繰り返し、摂理を破綻させることもあるというのです。ですので、よく祈った上で、どうしても言うべきだと思うのであれば、相談するのはその相手ではなく、中心者ではないでしょうか。

それであるがゆえに、中心者は様々な話を聞かなければならないので、それだけの判断力と信仰が求められるのだと思います。いちばんの問題は、私たちがノアのときのように中心者につまづいたときなのです。その時、思い出して欲しいのです。今、目の前にいる中心者はどのような勝利圏を持っているのかということを。それが発見できれば視点は神様の位置に立ちますので、正論が見えると思います。それが見えないとするならば、それは自分の無知ゆえに中心者をイエス様のように十字架にかけたこととなります。それで、自分が救われるのでしょうか。答えは逆で、救ってくれる人を自分で殺してしまっているのと同じなのです。

ですので、自分の小さな価値観で人を判断することは大きな誤りを生み出します。あたかも自分を救ってくれる人を拒むかのごとく。それであるがゆえに、人間としての器を大きくする為に、教会では人種のるつぼのように様々な人が集まっています。ですが、みんな愛すべき兄弟姉妹なのです。兄弟はケンカをします。それを止められるのは父母だけです。中心者とはそのように貴重な存在なのです。皆様はいかがですか。中心者の方をどのような視点で見られますか？

【御言】

アブラハムの家庭を中心とする復帰摂理

- ・神様は、アブラハムに鳩と羊と雌牛とを供え物としてささげるように命ぜられました。
- ・アブラハムは、鳩だけは裂かなかったので、荒い鳥がその死体の上に降りました。
- ・それは善悪が分立されず、サタンの所有物であることを、再び、確認してやったのと同様の結果をもたらしてしまったので、
- ・象徴献祭の失敗によって、蕩滅復帰しようとしたすべてのものは失敗してしまいました。
- ・その結果、アブラハムの子孫が、エジプトで、400年間苦役をするようになり、アブラハムを中心とする摂理は、イサクからヤコブまで、三代にわたって延長されました。

【感想】

ここではアブラハムの象徴献祭の失敗について書かれています。では、これはアブラハムの記録に留まるのでしょうか。いいえ、私たちの信仰路程において、往々にして起こりえることなのです。例えば皆さんが、まず20キロの荷物をどこかに運ぶとします。力がいらしますので、一生懸命持ち上げて目的の場所まで移動することでしょう。次に10キロの荷物を移動するとします。これも重いので、頑張って移動するとします。その後に20グラムの書類を渡され、これを同じ場所に持って行って欲しいと頼まれたとき、それに全力を投入することができるでしょうか。あまりにも簡単に思えて、いつでもできると感じて、ついに忘れてしまったということもあるのです。でも、フタを開けてみれば、その書類は荷物の納品書で、それがいないためにせっかく移動した荷物の苦労が水泡に帰ってしまったというのです。

予定論にもありますように、摂理が成就するためには、私たちは全力を投入しなければならないようになっています。ところが、鳩を裂くことに全力が必要でしょうか。一見、簡単に見えてしまうというのです。そこに落とし穴がありますよというのです。

私たちの信仰路程において、中央から来る目標は本当に難しく思われるかもしれません。ですが、その目標が難しそうに見えるがゆえに、私たちは全力を投入することができるという側面があるのです。それに比べて中心者から簡単な事務的な用事を頼まれたとします。摂理のことで頭がいっぱいでその簡単なことを忘れてしまうかもしれません。それがアブラハムの失敗と同じだということです。簡単と思えることに精誠を込めるというのは、難しいことに取り組むより難しいということをごのこのころでは物語っていると思います。

ですので、気をつけるべき時は、摂理が簡単に思えたときなのです。どんなに簡単に思えても、

精誠を込めることをおろそかにすると思わぬ失敗をするということです。私たちは当たり前のようにできることを繰り返してもある意味、成長できないのかもしれませんが。新しいことにチャレンジする、より高い目標にチャレンジすることで、私たちは新しいものを得、成長できるのではないのでしょうか。です、簡単と思われることを頼まれたときが実はとても気をつけないといけない時でもあるとこのアブラハムは私たちに語っているようにも思います。

【御言】

アブラハムのイサク献祭

- ・「象徴献祭」に失敗したのち、再び神様はアブラハムにイサクを燔祭としてささげよと命令されました。
- ・アブラハムが、絶対的な信仰で神様のみ言に従い、イサクを殺そうとしたとき、
- ・神様は殺すなと命令されて「あなたが神様を恐れる者であることをわたしは今知った」と言われました。

【感想】

ここではアブラハムがイサク献祭に成功したことが記されています。愛するわが子を殺すようなことを神様はなぜ指示されたのかというと、先の象徴献祭で失敗した為に、侵入を許してしまったサタンを分立する必要があったからだということが分かります。このように、私たちも侵入してしまっているサタンを分立するには苦痛が伴うということを知っておくべきだと思います。神様は無条件に人間を救うことはできないというのは予定論でもお話したと思います。それであるがゆえに、自己中心的な生き方に染まっている人間が、その中心を自分から神様に移すということは簡単なことではないことを物語っています。

私たちもイサク献祭という路程を通過して自分の執着している大事なものを犠牲にしても、神様のみ旨を優先するという決断をしたことがあると思います。その意味においても、自分の執着が往々にして自己中心的なものであり、それを神様を中心とした実践に移すのは多くの困難を必要とすることを物語っています。

ですが、このイサク献祭を通過することで、私たちは本当に自分にとって必要なものを神様から与えられるのです。どうでしょう。皆様は自分の執着というものを感じられたことはありますか。そして、そこにサタンが侵入している可能性があることをご存知ですか。その執着が判断を誤らせることもあれば、その執着を断つことでイサク献祭のようにサタンが分立されることもあるのです。

アブラハムは象徴献祭に成功していればイサク献祭の必要はなかったというのもお分かりだと思います。このように、摂理とは常に私たちの100%の精誠を必要としていることをアブラハム家庭は見せてくださっているように思えました。

【御言】

イサク献祭の結果

- ・神様のみ旨に対するアブラハムの心情や、その絶対的な信仰と従順と忠誠からなる行動は、イサクを殺した立場に立たしめたので、イサクからサタンを分離させることができました。
- ・アブラハムがイサク献祭に成功することによって、アブラハム家庭を中心とする復帰摂理は、イサクを通じて成し遂げていくようになり、
- ・イサクは、アブラハムの使命を受け継いで、「象徴献祭」に成功して、「信仰基台」を蕩滅復帰しました。

【感想】

ここにおいて、イサクにおける勝利圏の相続ということが成功した例を原理は紹介しています。この部分はノア家庭におけるハムの失敗と対比して見るとよく分かります。そして、これは、過去のこ

とに留まらず、私たちにおいても、真の御父母様の勝利圏を相続する際に必要となる要件になってきます。つまり、血統的に子女となっても、私たちはハムにもなり得るし、イサクにもなり得るということです。その違いはというと一言で言うと心情的な一体化が成されていたのかということだと思います。イサクはアブラハムの天の摂理に対する忠節を完全に相続しており、アブラハムと心をつなげて、献祭に臨み、その命を差し出したということではないでしょうか。私たちの信仰路程においても、そのような従順さが求められるのです。

真のご家庭におかれても、単に血統的に繋がっているからといって、御父母様の勝利圏を相続できるものではないのです。イサクのように、御父母様の心情と完全に一体化して、御父母様に対する従順さをカイン圏の前に示すべきなのです。

神様は私たちの信仰のレベルに応じたイサク献祭を求められることがあります。お金に執着していれば、献金路程で高い目標が与えられたり、子供に執着していれば、子供に問題が発生したりと。そして、そのような執着を捨てて、何よりも天の父母様を愛することを願われるのが天の父母様なのです。

皆様はいかがですか。お金がないと生きてゆけないと、お金を稼ぐことを最優先するようなことはありませんか。そのために、天の摂理に合わせるができなかったり、十分な献金実績が出なかったりと、様々に摂理に支障が生じるのです。私たちに必要なものは全て天が用意されます。授かった子女も天のはからいゆえなのです。それであるがゆえに、私たちは何よりも天の父母様を愛すべきであり、真の御父母様を愛すべきなのです。

真のお父様の御言を学ばれると分かると思いますが、天の父母様が何よりも私たちに求められるのは、愛情なのです。決してお金や権力や知識ではありません。そのようなものは神様を愛することで備わるようになってくるということです。お金を集めようとお金も散ってしまいます。受けようとするからです。お金を為に上手に使おうとすれば、お金は寄ってきます。与えようとするからです。この違いは何によって生まれるのでしょうか。為に生きる愛情という動機によるのです。その動機を与えてくださるのがまさに天の父母様であるがゆえに、私たちは何よりも天の父母様を愛するという道理が立つのです。

アブラハムが天の父母様よりもイサクをより愛してしまっていたとしたら、そこにはサタンが手をつけるということです。イサク献祭の勝利の秘訣は、イエス様の御言のように「思いを尽くし、全てを尽くして、汝の主なる神様を愛せよ」なのです。なぜかという、このイサク献祭と関連しているということです。

皆様はいかがでしょう。天の父母様を最優先する生活をしていると言えるのでしょうか？ 私たちは天の父母様の優先順位を少しでも上げるだけで、天運という運勢が違ってくるということです。皆様の優先順位はどのあたりですか。最優先になっていますか？

【御言】

実体基台

- ・イサクの家庭において、彼の子エサウとヤコブとを、カインとアベルの立場に分立して、「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」を立てて、「実体基台」を完成しなければなりません。
- ・ヤコブは、天使との組み打ちに勝利して、天使に対する主管性を復帰することにより、イスラエルという選民形成の基盤をつくりました。
- ・エサウは、ヤコブがハランからカナンへ帰ってきたとき、彼を愛し、歓迎したので、彼らは「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」を立てることができ、
- ・アダムの家庭から「実体基台」を蕩滅復帰するために続いてきた縦的な歴史路程を、イサクの家庭で初めて、横的に蕩滅復帰するようになりました。

【感想】

ここでの重要なポイントは、ヤコブがエサウに多くの財物を先駆けて贈り、エサウを讃美したこと

ではないと思っています。それ以前に、重要なポイントはヤコブがエサウに会う前に、天使に対する主管性を復帰したことではないでしょうか。このような霊的な手続きをきちんとして、会ったがゆえに、ヤコブとエサウが会うときには、エサウの背後の悪霊をヤコブが分立することができたので、墮落性を脱ぐための蕩滅条件が成立したのだということだと思います。

ですので、これは私たちにも当てはまることで、伝道対象者に会う前にきちんとこのような霊的な手続きを踏まないと摂理は円滑に進まなくなるということを私も何度も経験しています。人間と会う前に、会う人の背後の霊界に対してきちんと救済する決意を伝え、救いの心情をしっかりと固めて会うと、このようにエサウのように快く迎えてくれることが往々にしてあります。

もちろん、その際に、ヤコブのなした実践も参考になります。きちんと、贈り物としてなにかしらのお土産を準備することや、本人が会う前に、誰かの紹介や相手に敵意のないことを伝えるメッセンジャーが立つとスムーズにことが運ぶのは、一般の社会でもよく知られていることだと思います。ただ、摂理はそのような外的なことだけで成就されるのではなく、原理はキチンと霊界を主管することの重要性を説いています。

このように私たちの信仰生活はとても霊界を意識した生活になります。この世的な見識では霊界に対する知識はまだ不明瞭で霊界というと恐れる怨霊的なものしか知られていませんが、私たちは善霊の存在も明確にし、善霊の助けを借りて、幸福な家庭生活を実現することを実践しています。

皆様はいかがでしょう。ご先祖様に守っていただいていることを感謝する習慣は日本の文化にもありますが、霊界をきちんと愛で主管することを実践できていると言えるでしょうか。私も多くの恨みの霊の問題を解決してきており、その恩恵には本当に感謝しています。皆様にもその恩恵が広く伝わることを祈っています。

【御言】

メシヤのための基台

- ・アブラハムの「象徴献祭」は失敗しましたが、イサクの家庭を中心として、「メシヤのための基台」が造成されました。
- ・アブラハムとイサクとヤコブとは、個体は異なりますが、み旨を中心にして見れば、みな一体だったのです。

【感想】

ここでは、摂理の延長について重要なことが語られていると思います。真のお父様の聖和を迎えて、地上に天国は実現されていないのに、霊界に行かれたことを、真のお父様は使命を完結されなかったと言う人もいるかもしれません。

ですが、真のお父様の使命は心情的に完全に一体化されている真のお母様に継承され、真のお母様の勝利は同時に真のお父様の勝利であるということが、ここでの説明で明確になるのです。つまり、人間としての個体は真のお父様と真のお母様では異なりますが、み旨を中心としてみれば一体であるということなのです。

つまり、私たちの路程においても、御父母様と完全に一体となることができれば、御父母様の使命を完全に継承することを意味しています。ですが、分派の問題はこの一体化の点で完全に崩れているのです。

摂理の継承者としての前提条件は、使命を担っている人との完全なる心情一体化です。真のお母様が真のお父様の摂理を継承できたのもその心情一体化の基準ゆえであり、郭グループが異端となるのも、真の御父母様との心情一体化が崩れているがゆえなのです。

私たちも様々な摂理的な責任分担を受けていますが、そこにおいて正しく摂理を継承しているのかどうかということは、いかに中心と心情的に一体となっているのかということが問われるのです。

私たちは御父母様や中心者に対してイサクのような従順さを持っているのかということを常に自

問自答しているのです。その点が本当に摂理に同参しているのかどうかという分岐点にもなると思っています。

そのような意味において、アブラハム家庭の勝利は私たちが学ぶべき内容がふんだんにあると思っています。もっと詳しいことをお知りになりたい方は、ぜひ原理購論を直接お読みください。

イエス様の時代の問題は、イエス様の十二弟子においてもイエス様の十字架の死に同参する者がいなかった点にあります。私たちは御父母様の摂理に同参する者として、イサクを愛し、その勝利圏を相続できればと思いました。皆様はいかがですか？

【御言】

第2章 モーセとイエス様を中心とする復帰摂理

サタン屈伏の典型路程

イエス様の典型路程としてヤコブ路程とモーセ路程とを立てられた理由

- ・神様はヤコブとモーセを立てて、将来、イエス様が来られて、人類救済のために歩まねばならない摂理路程を表示してくださったのです。
- ・ところが、神様にも屈伏しなかったサタンが、イエス様に屈伏する理由はさらにないので、ヤコブとモーセを立てて、サタンを屈伏させる表示路程を見せてくださったのです。

【感想】

アブラハム家庭は個人レベルの怨讐を解き、サタンを屈伏させる路程でしたが、モーセとイエス様の路程は、多くの民衆を率いる際に必要になるリーダー教育の根幹となるサタン屈伏の方法が示されています。私たちが氏族を率いるというときも、家庭レベルでのアブラハムの教訓以上に、このモーセの教訓が役立つと思います。このように、モーセ路程はイエス様のためにだけ示されたのではなく、御父母様に従う、多くの兄弟姉妹のリーダーとなる人が備えるべき内容を示しており、その内容を私たちも学んで行きたいと思います。

まず、サタンは神様にも屈伏しなかったことを覚えておいてください。ですので、み旨の道においてどんなに立派な人だと言っても、何もしなければサタンは屈服しないというのです。ですが、神様は全能であられましたので、そのサタンを屈伏する方法もご存知であったというのです。ですので、神様はヤコブとモーセを通じて、イエス様にどのように歩むべきなのかを教示なさったというのです。この教示は私たちの歩みにも生かされるというのがこの内容の重要なポイントだと思います。

このように、原理は私たちの歩むべき道を常に示しているというのです。ですので、私たちは何をすべきなのかが明白なのであり、暗中模索ということがないのです。すでに、勝利された御父母様の路程があるがゆえに、私たちはその歩まれた道をたどるだけなのです。ですので、してはいけないことを列挙したような十戒ではなく、私たちに何をすべきなのかという典型路程を与えられているというのが本当に大きな恩恵であると言えるのではないのでしょうか。

注意してください。この道のリーダーとは群衆のサタンを屈伏させなければならないのです。この世的なリーダーの素質だけでは、能力だけでは不十分なのです。ぜひ、これからのリーダーを目指される方はこのモーセ路程を詳しく学ばれ、群衆のサタンを愛で屈伏して心情的先駆者となれることを私も祈っております。皆様も人の上に立つのであれば、是非、このモーセ路程を学ばれることをお勧めします。

【御言】

モーセ路程とイエス路程

- ・モーセがサタンの世界であるエジプトから、イスラエルの選民を奇跡をもって導きだし、神様が約束された土地であるカナンに向かう路程は、
- ・将来、イエス様が罪惡世界において、キリスト教信徒を奇跡をもって導き、神様が約束された創造本然のエデンに復帰する路程を、先に見せてくださったのです。

・この路程は、イスラエル民族の不信によって、各々三次にわたって延長されました。

【感想】

モーセもイエス様も多くの奇跡をもって信徒を導かれたのは共通した内容だと思います。では、その使命を継承された御父母様は奇跡をなされたのでしょうか。真のお父様は奇跡的なことを起こそうと思えばできないことはないと言われていたこともあります。ですが、奇跡には大きな落とし穴があることを真のお父様はご存知だったのです。信徒の5%、つまり、従う者が100%を投入しなくては摂理は進まないという予定論において、メシヤが一方的に奇跡という業をもって恩恵を与えてしまえば、それを受けた人は功労をかなり消費してしまうということなのです。それであるがゆえに、モーセの時も、イエス様の時も、従った民は本当に不信仰を繰り返してしまいます。

よく考えてみれば、奇跡は往々にして瞬間的な出来事が多いです。不治の病が治ったとか、様々な現象を見ても、とても外的な要因を含んでいます。ですが、真の御父母様はそのような目に見える外的な奇跡を行われたのではなく、墮落した私たちの血統を神様の血統に転換するという根本的、心情的な奇跡の業をなされたのです。ですので、その奇跡にふさわしい精誠が準備されなければ、遠からず帳尻を合わせるように試練が訪れるというのです。

イエス様も言われています。「汝の罪は許された」と贖罪の役事をなされたのちに、「病人の病気を治すのとどちらからが簡単か」と半ば怒られたように病人を癒される場面があります。真のお父様はその過ちを見抜かれていたのです。

ですので、私たちは伝道するにおいても、清平に連結すれば、様々な病気が奇跡的に回復し、幸せになれるという導き方は、モーセやイエス様の奇跡信仰と同じなのです。これは遠からず、多くの試練を経験し、不信を誘発しやすいというのです。ですので、私たちはしっかりと血統の重要性を説明した上で、血統転換されて神様の血統に接木されることを強調しておく必要があると私は思っています。

外的な奇跡を動機とするとその信仰はとてもゆれやすく、奇跡が起こらないと不信しやすいという側面があります。皆様も氏族に向かわれる時は、お気をつけください。

【御言】

モーセを中心とする復帰摂理

第三次民族のカナン復帰路程 信仰基台

・第一次パロ宮中40年、第二次ミデヤン荒野40年の民族的カナン復帰路程は、イスラエル民族の不信により、すべて失敗に終わりました。

・第三次民族のカナン復帰路程において、モーセは、ひたすら信仰と忠誠をもって、幕屋を信奉しながら荒野を流浪したあと、カデシバルネアに戻ってくる荒野流浪40年期間をもって、「信仰基台」を立てることができました。

【感想】

モーセ路程で重要なのは、中心者が勝利すればそれでいいというものではないという点です。リーダーがどんなに立派で実績を出していたとしても、そのリーダーに従う人がリーダーを信頼しなければ、集団としての摂理は失敗に帰してしまうというのです。これが、リーダーの難しさなのです。従うものの信頼を勝ち取るというもうひとつの側面が要求されるのです。ですので、スポーツ界でも名選手が常に名監督になるかというところでもないというのがやはりあるのです。

モーセは従ってくるはずのイスラエル民族を迫害する敵とも思える存在を打ったとしても、彼らは従わなかったというのです。教会においても、迫害を加える存在を中心者が打って、いかに従ってくるものを守ろうとしているのかを示したとしても、その心が通じないことがあるというのです。そして、従うものの信頼を得られず荒野に追い出してしまったのもイスラエル民族なのです。

この路程は御父母様の生涯路程においても何度も登場します。従ってくる信徒の不信仰ゆえに

どんなに御父母様が勝利されても荒野に追い出されなければならなかった事情というのが何度も登場します。

ですが、そのように裏切られたとしても、なお真の愛を投入され続けたのが御父母様であり、リーダーもそのような素養が求められるというのだと思います。ですので、血気にはやる将軍が大勢の群集をリードするということは私たちの間にはないのです。御父母様もそのような血気を自ら主管され、私たちを愛して、その愛を貫かれた人生だったのを私たちは知っています。

ですので、私たちは中心者の前に、中心者の信仰基台を立てる精誠を徒労に終わらせてはならないのです。そのような中心者を信頼し、どこまでもカインとして実体基台をいかに造成するのかに集中すべきなのだと思います。一見、何の実力もなさそうに見える中心者に見えたとしても、その中心者は私たちの知らない所で信仰基台を準備されているのです。カイン圏の不信仰で無に帰するかもしれないとわかっている、それでも、従うものを愛する真の愛の愛情がリーダーには求められると思います。そして、そのような愛情は人間に起源を置くのではなく、間違いなく根源は神様にあります。それであるがゆえに、血統転換ということは、そのあふれる心情によって必然的にリーダーとならざるを得ないようなものでもあると思います。

ですので、これからの時代のリーダーは祝福を受けて血統を正しておく必要があるという結論が導かれるのです。ここに中心者が優秀でさえあれば全体の勝利を導けるというのがそうではないということを原理は説いています。ですので、日本のように和の文化と中心を信頼して素直に従う従順さが美德とされることは原理にもなっていると、ここからいえると思いました。ぜひ、皆様もリーダーとして成長されることを祈っています。

【御言】

第三次民族のカナン復帰路程 モーセを中心とする実体基台

- ・イスラエルが、信仰と忠誠により幕屋を信奉し、モーセに従い、カナンに入れば、「実体基台」がつくられるようになっていました。
- ・神様はモーセをして、杖をもって岩(磐石)を打ち、水を出させて、彼らに飲ませられました。
- ・ところがモーセは、不平を言い、つぶやいている民を見たとき、憤激のあまり、血気を抑えることができず、磐石を二度打ったので、それはサタンが侵入できる行動となり、「出発のための摂理」は、成就することができなくなりました。
- ・モーセはカナンの地に入ることができず、120歳を一期として死んでしまいました。

【感想】

ここではモーセの憤激の情が摂理を失敗させたことを物語っていますが、これはモーセに限ったことではありません。リーダーとして集団を率いるのであれば、集団のメンバーがいかにブツブツと文句を言ったとしても、それをじっと聞きつつ、常に沈着に冷静に判断しなければならないことを意味しています。ですので、私たちのリーダー教育においても、情に流されず、沈着冷静な判断を下すことを鍛錬されることが往々にしてあり、それは真のお父様においても同じだったと言われます。真のお父様も激しい情の持ち主でしたが、その自分を主管することに精誠を捧げられ、「天宙を主管する前に自らの自己を主管せよ」と語られ、私たちの信仰の指針にもなっています。

ですので、私たち従う者は不平や不満を慎むべきなのです。なぜかというと、私たちの不平や不満が中心者の耳に入り、血気や怒気を誘発してしまうと、重要な判断を誤らせてしまう危険があることを、このモーセ路程はしっかりと示しているのです。ですので、中心者の怒りを買うような言動をすることは、それは中心者を十字架につけるにも等しいことになります。

もちろん、適切な報告は必要になるのが報告・連絡・相談の基本ですが、カナンの偵察のように、否定的な展望を前提にした報告は私たちは極力避けるべきだと思います。皆様はいかがでしょうか。自分の感情を主管できずに、怒気にはやったり、血気に走るようなことはありませんか。そのような時は危険だと認識すべきなのです。モーセのように摂理的判断を誤る可能性をはらんで

いることを忘れないでください。

これからリーダーになろうとされている方は、自分が怒りっぽいとか、イライラしやすいということを自覚されましたら、そのときこそ、真のお父様の苦労をしのびながら自分を主管されることを学ばれることを祈っています。

従うものはリーダーの怒気を誘発するような不平や不満は慎むこと、リーダーは従うものがどのような言動をしたとしても、感情的に怒りを爆発させないこと。モーセはそのような教訓を私たちに残してくれていると思います。皆様はいかがでしょう。自分の子供に向かって感情的に怒っているようなことはありませんか。

【御言】

第三次民族のカナン復帰路程 ヨシュアを中心とする実体基台

- ・神様は、ヨシュアをモーセの代理として立てられました。
- ・ヨシュアは二人の偵察をエリコ城に送りました。偵察を終えて戻ってきた二人の偵察者は、信仰をもって報告しました。
- ・このとき、荒野で出生したイスラエルの子孫たちは、みなその言葉を信じたので、彼らは出発することができました。
- ・過越しの祭を守ってのち、エリコの城壁に向かって進軍しました。七日間、城を回った後に、ヨシュアの命令で、一斉に大声をあげて呼ばわったので、その城がたちまちにして崩れてしまい、カナンに入ったヨシュアは 31 王を滅ぼしました。
- ・このようにして、第三次の民族のカナン復帰路程の「実体基台」がつくられたのです。

【感想】

私たちはよく教会においても、報告、連絡、相談を強調されます。そのような中で、報告においてもただ現実を表現しただけの報告では摂理は進まないこともあるということです。そこにどのような動機で、どのようなことを前提として報告しているのかというのが問われると思います。

では、信仰をもって報告するとはどういうことでしょうか。ここには肯定的な未来のビジョンをもって報告することではないでしょうか。カナンには必ず入れますということを前提に報告すると、現実を述べたとしても、その実現の可能性を裏付ける材料になるということです。

これとは対照的に失敗した不信仰な報告もモーセ路程では登場します。12 人の偵察を送りながら、ヨシュアとカレブを除いた 10 人の報告者が、カナンに入れないという否定的な前提をもって、そのようなことを裏付ける材料として現実を報告したのです。

では、両者を分けたのは何なのでしょう。簡単に言うと、摂理が成就することを裏付ける材料として現実を述べたのか、摂理が成就できない言い訳として現実を報告したのかということです。私たちにもありませんか。「これこれ、こういう理由でできません」と言って、中心の要望を否定してしまうことがあると思います。このような報告がモーセ路程における不信仰な報告の例かもしれません。同じ現実を述べても、「今はこれこれですが、こういうことがあるので、将来きっと勝利できます」と肯定的なイメージをもって現実を見れば、それは信仰をもって報告することになるとは思いませんか。

日本の文化は意外とこれが苦手かもしれません。完ぺき主義という風潮があって、ややもすると「できないこと」に目が向きやすいのです。少しでも不安材料があれば、「こういう心配があるので、無理かもしれません」と普通に言っていないでしょうか。摂理の成就是「こういうことがあるかもしれません」で勝利できます。というイメージから生まれると思っています。よくプラス思考と言いますが、その大切さはモーセ路程においても言えることなのです。

その可能性を群衆が信じることができれば、その群衆は出発することができるということです。では、皆さんはどうでしょう。不可能なことに意識が捕らわれますか、それとも可能性のあることに意識が捕らわれていますか？ 前者はできなかったという現実を引き寄せ、後者はできましたという現実を引き寄せるということです。勝利するのはどちらかというと明白なのです。皆様はいかがですか？

できる可能性を信じていますか、それともできない可能性に怯えていますか？ これも簡単な心の持ち方という習慣で変えられるということを多くの人は知っているし、その重要性をモーセ路程は示していると思います。

【御言】

イエス様を中心とする復帰摂理

- ・ヤコブはサタンを屈伏させる象徴的路程を歩んだのであり、モーセは形象的路程を歩み、イエス様は実体的路程を歩まなければなりませんでした。
- ・それゆえに、イエス様は、モーセがサタンを屈伏していった民族のカナン復帰路程を見本として、サタンを屈伏させることによって、世界的カナン復帰路程を完遂しなければなりませんでした。

【感想】

イエス様はまさにサタンを屈伏させる方法を良く熟知されていたのだと思います。この世的な常識とは言わばサタン世界の常識でもあるので、ある意味、神様の摂理や原理とはすぐわなような面もあります。そして、様々な経験の積み重ねによって、サタンを何とかなだめながら事を運ぶことを培ってきたのかもしれませんが。ですが、原理とはそのような暗中模索の中から生み出されたものではなく、神様の啓示により解き明かされたものなのです。

ですので、私たちも原理的に歩むことができれば、サタンを屈伏させながら摂理を進めることができるようになることを示してくださっているのです。覚えておられますか？ サタンは神様にも屈伏しなかったのです。ましてや、人間的な地位や権力に屈伏する道理もないのです。そのようなサタンの讒訴を完全に防いで摂理を進められたのが真の御父母様なのです。ただ、そのことを従う信徒は知りえずして、サタンの御父母様への直接の攻撃を防ぐことができなかったというのは、摂理歴史が物語っています。

私たちもどのようにすればサタンを屈伏できるのかを熟知して、愛して伝道を進めるべきだと思います。ここでは、どんなにイエス様が立派であったとしても、従う信徒が不信仰を犯すとイエス様を十字架にかけてしまうことを肝に銘じ、中心者を支えて、摂理を支えられることを祈っています。

【御言】

第二次世界的カナン復帰路程 信仰基台

- ・第一次世界的カナン復帰路程は、洗礼ヨハネの不信によって失敗に終わりました。
- ・イエス様自身が洗礼ヨハネの使命を代理して、40 日間断食されながら、三大試練を受けてサタンを分立することにより、第二次世界的カナン復帰路程を出発することができる「信仰基台」を蕩滅復帰されました。

【感想】

イエス様の世界復帰路程を見る時、洗礼ヨハネの存在がいかに大きいかを知ることができます。一度はイエス様を自分よりもはるかに聖なるお方として証していたにもかかわらず、ある意味、世俗的な地位や立場に固執するあまり、イエス様を不信してしまった結果になったのです。この失敗は真のお父様の時にも起こります。ちょうど同時性と言われるように、洗礼ヨハネの使命を担われた方が、真のお父様の前におられたというのです。ですが、その方も不信に陥り、ここで記されているように真のお父様は苦難の路程を歩まれます。

私たちも氏族の前に立つとき、氏族を取りまとめることのできる洗礼ヨハネ的な存在が登場することに気づかれるでしょう。ですが、その方は私たちが家庭連合員であることを理由に、世間からの迫害を恐れ、関係を持たないと敬遠されたことがやはりあるのではないのでしょうか。

そのような洗礼ヨハネの失敗により、私たちも本来に受けなくても良いサタンの試練を受けて、洗

礼ヨハネの使命を代理するというのです。

皆さんも同じようなことはありませんか。自分の地位や名誉、社会的な立場などに固執するあまり自分は家庭連合員ではありませんと自分を偽ったことはありませんか。そのような行動が真のお父様を試練に追いやったということを私たちは知っておくべきだと思います。真の御父母様が私たちに代わって、洗礼ヨハネの使命を担われたのです。その意味において、直接伝道が推進されることに、原理的な大きな意味があると私は感じています。

【御言】

第二次世界的カナン復帰路程 実体基台

・しかし、ユダヤ民族の不信によって、イエス様は十字架の死の道を歩まなければならず、したがって、第二次世界的カナン復帰路程も失敗に終わりました。

【感想】

イエス様の第二次世界的カナン復帰路程もここで紹介されるように失敗に終わります。その結果、イエス様は十字架にかけられ、死の道を行かれました。それと同様に真の御父母様も私たちの不信ゆえに多くの心情的十字架を背負われたというのは、もう歴史が証明しているのです。そのような十字架を背負わせてしまったのが、当時、従うべきユダヤ民族であり、イスラエル民族だったということをごここでは紹介しています。

同じように、私たちが氏族のメシヤに立てられるということは、教会に反対する氏族からイエス様のように十字架にかけられるようなことも起こりえるということなのです。これは、よくよく理解して決意しなければならないことなのです。この世では肉体的な死を与えれば殺人罪で裁かれます。それゆえに、肉体的な死を与えるようなことはしないでしょ。ですが、霊的な死に対する法的な整備は憲法において思想や信じる信教の自由が保障されていると言われても、暴力的に改宗する事件が今もあります。

なぜ、このようなことが起こるのかというと、その理由もイエス様の路程で原理は説いています。氏族的メシヤとして立てられている私たちにおいても、従うべき氏族が不信することでこのように心情的な十字架にかけられることもあることを知っておくべきなのです。

ですが、その十字架で摂理は終わるのではなく、それでも神様と真の御父母様に対する愛情と忠孝の心情が変わらないとすれば、摂理は第三次に延長され、三次においては必ず勝利できるようになっているというのです。

ですので、御父母様に従い、氏族のメシヤとして歩むにおいては、氏族的レベルではありますが、イエス様や御父母様のように十字架を背負う覚悟というものが問われることがあると思います。そのような十字架におびえることなく、勇敢に立ち向かって行ったのが、これまでの先輩家庭の皆様であり、これから私たちが向かうべき道ではないでしょうか。ですから、御父母様も鼓舞されるのです。強く雄々しくあれと。皆様はいかがですか。自分を愛するあまり、十字架を恐れているようなことはありませんか。ですから、イエス様も語られたのです。「死なんとする者は生きる」と。愛情は死をも超えることがあります。そのような愛情を私たちは復帰しようとしているのです。

【御言】

第三次世界的カナン復帰路程 霊的な信仰基台

・復活されたイエス様は、霊的洗礼ヨハネの使命者としての立場から、40日復活期間をもってサタン分立の霊的基台を立てることにより、
・第三次世界的カナン復帰の霊的路程のための、「霊的な信仰基台」を復帰されました。

【感想】

ここでもお分かりのように、人間は肉体が死ぬことで全てが終わるわけではないのです。この世

的な支配者は、イエス様を殺害すれば、すべてが終わると思っていたかもしれませんが。単なる異端者を殺害して、自分たちの生活は守られたと。ですが、イエス様も御父母様も明確に霊界の存在を語られており、重大な使命をもって地上に誕生した人々は、その使命を果たすために、肉体の死後も活躍されているというのです。

私たちの教会においても、清平で大母様や興進様が役事され、その恩恵は広く教会員に広まっています。さらに真のお父様が聖和された後にも、多くの活躍を霊界でされているという報告も私たちは受けています。

では、私たちはどうでしょうか？ やはり、与えられた使命を果たせずに霊界に行くとしたら、やはり、地上に再臨して役事することが必要になってくるということをここでのお話は物語っていると思います。

イエス様は十字架の死後においても、摂理を忘れることなく、霊的な信仰基台を復帰され、かつての信徒を呼び集められました。この復活がきっかけとなり、キリスト教の爆発的な伝道が展開されるようになります。

皆様はどうでしょうか。肉体が死んだ後には安楽な極楽に行き、何事もなく暮らせると思っておられるようなことはありませんか。自らの使命を悟るとき、そのようなことはなく、霊界においても忙しく活動していると私は思います。

【御言】

第三次世界的カナン復帰路程 霊的な実体基台

- ・復活されたイエス様は、霊的な実体となられ、弟子たちに奇跡の権威を授けられることによって、「出発のための摂理」をされたのです。
- ・ここにおいてカインの立場に立っていた信徒たちは、復活されたイエス様を信じ、仕え、従って、「墮落性を脱ぐための霊的な蕩滅条件」を立てることにより、「霊的な実体基台」を復帰することができたのです。

【感想】

霊界に行かれたイエス様はこのように復活され、弟子たちに様々な権能を授けられながら、出発のための摂理をされます。私たちの路程においても、真の御父母様から様々な権能を授けられ、伝道に出発したことは覚えておられると思います。今も祝福において入籍家庭は御父母様から権能を与えられ、伝授された聖酒を授けることができるようになっています。このような権能を授けられるということは、伝道においても出発の摂理を意味しており、その出発をもって私たちは御父母様をさらに信じ、侍り、カインとしての墮落性を脱ぐ蕩滅条件を立ててるべきだと思います。

私たちはそのように御父母様に侍りつつ、墮落性を脱いでゆかなければならないと思います。真の御父母様から一方的に恩恵のように権能を与えられているのではなく、そこには伝道における出発の摂理の意義があり、さらにその権能の恩恵に大きく感謝しつつ、自らの墮落性を脱いでゆくべき時代だと思います。

今も言われているように、実体基台をしっかりと立てて、私たちはメシヤのための基台を準備し、御父母様をお迎えして生活して行きたいと思いました。

【御言】

第三次世界的カナン復帰路程 再臨主を中心とする実体的カナン復帰路程

- ・イエス様は、霊的カナン復帰路程を、再臨されてから実体路程として歩まれ、地上天国をつくらなければならないので、再臨主は、実体の人間として、地上に生まれなければならない。
- ・再臨主は初臨のときのように、復帰摂理の目的を完遂できないで、亡くなられるということはありません。なぜなら、摂理は、アダムからイエス様を経て、三度目である再臨のときには、必ず、その摂理が成就されるようになっているからなのです。

・その上、イエス様以後 2000 年間の霊的な復帰摂理によって、彼が働きうる社会を造成するために、民主主義時代をつくっておかれたからです。

【感想】

既成教会のクリスチャンの方々はイエス様は空から降りてこられるという信仰を持たれていると私達も学びます。ですが、現実の再臨主は、女性の胎中から生まれることを、ここでは明言しています。つまり、真の御父母様も人間の胎中から誕生されることを私たちは明確に理解するのです。

そして、真の御父母様は復帰摂理の目的を完遂されることを、原理は明言します。真のお父様が聖和された今、ある人は摂理は御子女様の時代まで延長され、真の家庭の血統において、摂理は成就されると思っておられる方もおられるかもしれません。ですが、ここでも紹介されているように、復帰摂理の目的とは三度目の再臨の時に必ず成就されるのが原理観であり、真のお母様も生存中に摂理を完結される決意で歩まれているのは、個人的な理由ばかりではないということです。

私たちは民主主義社会に生きていますが、この社会そのものが再臨主が働くことができるように神様によって創造されていると知る人は少ないと思います。民主主義社会の存在理由を考える人も少なく、気が付いてみれば民主主義社会に生まれていたというのが素直な感覚かもしれませんが、民主主義社会とはそもそも真の御父母様の活動できる基盤として創造されているということを、ここでは明確に明言しています。ですので、民主主義社会において御父母様を知らないということは、その存在価値も目的も喪失した人生になるのです。このことは、地位や名声など高い位置に立つほど悟りずらくなっています。そのことをイエス様はサタンより受けた3つ目の試練として聖書は記録しています。

どうでしょう。私たちの人生は自分の為にあるのでしょうか。それとも、神様の為にあるのでしょうか。後者であるがゆえに、自分の誕生した目的も自分の本来の価値も明確になると私は思っています。

【御言】

・再臨のイエス様は、み言を中心とする「出発のための摂理」によって、「メシヤのための基台」を実体的に造成し、彼らが原罪を脱いで、神様の血統を受けた直系の子女として復帰できるようにしなければなりません。

・そして「メシヤのための基台」を、実体的に家庭的なものから出発して、民族的、民族的、国家的、世界的、宇宙的なものとして復帰され、その基台の上に、天国を成就するところまで行かなければならないのです。

【感想】

よく、私たち食口はイエス様以上の立場に立つと言われます。その理由の一端が、御父母様の摂理によって、ここでの御言のように私たちが直系の子女にまで復帰されるからなのです。そして、結婚できなかったイエス様以上に、御父母様から祝福を受け、家庭を築き、子女を生んでいるということが、イエス様以上の立場だということです。このようなことを既成教会の人たちが聞くと、いかにも傲慢であると言われるのですが、完全な救いということを考えるとこの原理はまったくその通りだと思えます。

では、私たちはイエス様よりも偉大なののでしょうか。そこには、絶対的に責任分担というものが存在します。神様の予定としては、御父母様が地上におられるうちに、信徒だけでなく、全人類を神様の直系の子女に生みかえるという摂理があります。ですが、私たちは神様の恩恵によって一方的に子女に生みかえられるのではなくて、そこには予定論にもあるように、神様の生み変えようとされる摂理に呼応する私たちの責任分担が存在するというのです。ですので、どんなに立派な立場に立てるとしても、私たちが責任を果たせなければ、絵に描いた餅なのです。

そのようなことまで知らされていると私たちは、何ができるのかを明確にして、天国を実現できると

いう前提において摂理に邁進すべきと思っています。真のお母様が言われる内容と決意にはこのような原理的な根拠があることを忘れてはならないと思います。地上天国は真のお母様が地上におられる内に実現されるべきなのです。それが正しい原理観であり、それが実現できることを保証するのも原理なのです。後は、私たちが責任を果たすか否かにかかっているということです。

天国は実現します。皆様は信じていますか。それを前提に歩んでいますか。原理は必然的にできると語っているのです。そのためには私たちの5%が必要だということを忘れてはならないと思います。

【御言】

第3章 摂理歴史の各時代とその年数の形成

摂理的同時性の時代

・ある時代がその前の時代の歴史路程とほとんど同じ様相をもって反復されるとき、そのような時代を摂理的同時性の時代といいます。

・同時性の時代が反復される理由は、「メシヤのための基台」を復帰する摂理が、反復されるからです。

・したがって、同時性の時代を形成する原因は、

①第一に、「信仰基台」を復帰するための三つの条件、すなわち中心人物と、条件物と、数理的な期間などです。

②第二は、「実体基台」を復帰するための「墮落性を脱ぐための蕩滅条件」です。

【感想】

ある歴史学者は同じような現象が何度も歴史上に繰り返されていると論じています。これは世界という大きな舞台の歴史に限りません。私たちの人生という歴史においても、同じことがいえるのです。私たちがメシヤであられる御父母様に出会うまでには、何度も同じような摂理が展開され、幾度かの摂理の失敗を経験して、私たちは導かれているということです。

ですので、同じような失敗を繰り返さない方法というのがここで明確に見えてくるのです。それが、メシヤのための基台をしっかりと造成するということなのです。信仰基台においては、しっかりと中央から来る指示に従って、私たちが中心人物となり、指示事項を条件物として、それを一定期間全うすることをしっかりと守るべきなのです。その上で、アベルに立ちましたら、カイン圏に愛情を施し、しっかりと自然屈服できるようにして、一体化することがポイントになるということです。ですので、カインの立場においては、アベルと一体化できると同じような摂理、試練は繰り返されないということです。これがポイントなのです。ですが、アベルと闘って一体化できないと、やはり同じようなアベルに巡り会うようになっているということです。この繰り返しがなぜ起こるのかという説明がここで明確になっているのです。

つまりは、実体基台を造成することができなければ、摂理は延長されて、同じような状況に再び置かれるという経験をするということです。ですので、先に進むには、どこまでも信仰基台と実体基台をしっかりと造成することを意識すべきということが基本になると思います。アベルの立場に立ってカイン圏を十分に愛しきれなかったとします。そうすると、そのようなカインと同じような氏族が現れるというのもこの原理なのです。

神様の摂理は予定論にもあるように必ず成就されなければなりません。それであるがゆえに、何度も同じような摂理が繰り返されるようなことが起こるということです。その連鎖を断ち切ることができるのは、簡単に言えば摂理を成就すれば良いということなのです。

仏教における輪廻もこれに起因します。立てられた人物が摂理を成就できないので、同じような立場の人が神様によって立てられるということです。その解脱の方法は、摂理を勝利すること、成就することにあるとここで明言していると私は思います。

【御言】

復帰摂理の延長

- ・予定論によれば、神様のみ旨は、絶対的なものとして予定され、成就されます。
- ・しかし、み旨成就の可否は、相対的であって、神様の責任分担とその人物の責任分担とが一体となって初めて成就されます。
- ・したがって、その使命を担当した人物が、責任分担を全部果たさないときには、時代を変えて他の人物をその代わりに立てても、必ず、そのみ旨を成就する摂理をなさるのです。このようにして復帰摂理は延長されてゆきます。
- ・復帰摂理が延長されるときにも、創造原理により、三段階までは延長され得ます。

【感想】

ここではどのような事情によって摂理は延長されるのかということが説明されています。簡単な結論から言うと、立てられた中心人物が責任分担を完遂できなければ、神様の摂理は成就されないもので、延長されるということなのです。

では、その中心人物とは誰なのでしょう。それが私達なのです。私たちは数多くの先祖に託された使命を継承しており、その神様に託された使命を果たすために今を生きていると言っても過言ではないと思います。いや、そんなことは関係ないと、無視しようとしても、その無関心の結果は人生における生きがいや人生の価値の喪失につながるのです。つまりは、最後には人生を空しく終わるしかないという結末になるのです。

誰もがそのような人生を望みません。生きがいのある、有意義な人生を過ごしたいと誰もが考え、人生において何をなすべきなのかということを模索するのではないのでしょうか。その人生においてなすべきことが、神様の用意された摂理だということです。その摂理の成就に向けて神様は常に自分の責任分担を果たされ、私たちが責任分担を全うすることを待っておられるということです。ですので、摂理が成就できなければ、神様は嘆息する間もなく次の摂理に向かわれるということです。

予定論を学ぶとき、はっきりするのは私に与えられる摂理は不可能なことは全く無いということなのです。神様は人間が責任分担を全うすれば成就できる摂理を常に準備されるということなのです。そのことを知りえない、私たちが、聞いただけでできないとか不可能だと思い込み、あきらめてしまうので、往々にして摂理は延長されることになることが多いのです。できると確信して実践する人が勝利をし、できないとあきらめて何もしない人が勝利できない摂理において、あなたはどちらになりたいと思われますか？ あなたは信じていますか？ 神様はできないことは要求されないということを。それであるがゆえに、必ず勝利できる道があるのが摂理と呼ばれるものなのです。

【御言】

第4章 摂理的同時性から見た復帰摂理時代と復帰摂理延長時代

- ・復帰摂理の目的は、「メシヤのための基台」を復帰しようとするところにあるので、結局、その基台を復帰するための「象徴献祭」と「実体献祭」を蕩滅復帰しようとして摂理的な史実を通じて、同時性の時代が形成されてきたのです。
- ・したがって、各摂理時代の性格を把握するためには、その摂理を導いて来た中心民族と、中心史料について知らなければなりません。
- ・アブラハムから始まったところの復帰摂理時代の摂理をなしてきたイスラエル民族史は、この時代における史料となります。
- ・イエス様から始まった復帰摂理延長時代の摂理をなしてきたキリスト教史はこの時代の史料となります。

【感想】

私たちは学校で歴史を学びます。その歴史を単なる年代や事実の暗記だけにしてしまうのは、あまりにももったいないことだと思います。歴史が示している教訓を今の生活に活用できれば、そこにはもっと素晴らしい価値を発見するのではないのでしょうか。

そして、歴史を見るときに、歴史の本流と支流があるということです。神様の目から見た歴史においては、本流とは中心民族史であり、それはとりもなおさず、イエス様の登場までのイスラエル民族史と再臨主が登場するまでのキリスト教史だということです。ですので、歴史を覚えるには、まずこの本流を覚えるのがとても原理では重要であり、そこに見られる同時性は本当に見事に展開されています。

なぜ同時性が生じるのかということは、前の話でもありますけど、メシヤのための基台を造成するためにどうしても象徴献祭と実体献祭が必要になるからだということなのです。この基台を準備できなかったのも、摂理は延長され、それゆえに同じような準備を神様は何度もされて、同時性が結果的に生じるということなのです。

ですので、国家の興亡盛衰から個人の人生における歴史においても、メシヤのための基台が準備されるまでは何度も同じようなことが繰り返されるということです。その連鎖はどこで断ち切られるのかというと、それはまさにメシヤのための基台が造成された時なのです。

ですので、私たちがメシヤのための基台をしっかりと立てて、御父母様をお迎えした時点で、私たちは新しい歴史を出発しているのです。ですので、多くの人が口々に言うのです。御父母様に会って人生が変わったと。なぜ変わるのでしょうか。それがメシヤのための基台が準備できたからなのです。御父母様に会って、メシヤを受け入れることで、繰り返されてきた家系の惨劇が蕩滅されて消え、新しい家系の歴史が刻まれ始めるということです。そのような意味で、私たちは家系の新しい歴史の先祖ともなっていると思っています。

これからイスラエル民族史とキリスト教史を見てゆきますが、そのあまりにも似ている路程にある人はその理由を研究し、また結果だけを発表し有名になった歴史学者もいます。そのような観点でこれから摂理歴史を少し学ぶことにしましょう。

【御言】

- ・復帰摂理延長時代は、形象的同時性の時代である復帰摂理時代を、実体的な同時性として蕩滅復帰する時代です。ゆえに、この時代においては、復帰摂理時代を形成する各時代とその年数を、そのまま蕩滅復帰するようになります。
- ・エジプト苦役時代 400 年は、復帰摂理延長時代において、ローマ帝国迫害時代の 400 年で蕩滅復帰する同時性の時代でした。
- ・このように、士師時代 400 年を蕩滅復帰する、教区長制キリスト教会時代 400 年があり、
- ・統一王国時代 120 年を蕩滅復帰する、キリスト王国時代 120 年がありました。

【感想】

ここでは中心民族歴史が本当に見事に同じ年数をもって繰り返されていることを確認します。ユダヤ民族歴史のエジプト苦役とキリスト教史のローマ帝国迫害の 400 年。これが見事に年数もほぼ一致してくるということを見ると、人類の歴史においても神様が関与され、働かれていることを否定することはできないと思います。

このようにある歴史学者は歴史が繰り返していると論じているのですが、その理由まではこれまで明確にされてこなかったのです。その理由までも明確にされ、繰り返される歴史にどのように終止符を打つのかも明確に解かれているのが、統一原理なのです。

このような歴史の同時性を紹介することは、人類の歴史に神様が関与されたことを示せることであり、これを単なる偶然とは決していえないのが私たちの現代の知識なのではないと思います。

歴史が繰り返されたのも、神様の摂理が成就し得なかったがゆえなのです。ですが、再臨主を

迎えた時代において、摂理は完全に成就され、このような蕩滅の時代が終結するので、今や新しい時代が始まっているということだと思います。その意味において、過去の歴史の経験が生きないということもありえるわけで、それであるがゆえに固陋な習慣的生活にとらわれると摂理を見失うと原理は警告もしています。

これから少し、歴史の同時性を見てゆきますが、その年数の一致性に改めて私は感動します。皆様はいかがですか。これを単なる偶然だとはとても言えないと私は思っています。

【御言】

- ・南北王朝に分立していた 400 年期間を蕩滅復帰する、東西王朝分立時代 400 年がありました。
- ・ユダヤ民族がバビロンに捕虜として捕らえられ、再び帰還する、ユダヤ民族捕虜および帰還時代 210 年を蕩滅復帰する、法王捕虜および帰還時代 210 年がありました。
- ・また、メシヤ降臨準備時代 400 年を過ぎたのちイエス様を迎えたように、メシヤ再降臨準備時代 400 年を過ぎて、初めて、再臨主を迎えることができるのです。

【感想】

前回に続き、摂理歴史の同時性を見てゆきます。そうすると、その中心歴史における数字的な一致性は本当に目を見張るものがあります。そして、この同時性のポイントとも言えることは、メシヤ再降臨の準備時代を経て、現代が再臨主を迎える時代になっているとことだと思います。

このように摂理歴史は神様の意図によって、それも見事な法則性をもって繰り返されたのです。これは、各時代を生きた人間には気づかれなかったことかもしれません。現に、今を生きている私たちの存在も地上には 100 年足らずしか長くても存在できないのです。それを数千年の長さで見るということは、本当に難しいことかもしれません。

皆様はいかがですか。歴史に関心があったとしても、その歴史の流れの方向性までを学校では教えてくれましたでしょうか。ですが、私たちはこの歴史の流れを学ぶことで、時代の流れもつかむことができるようになるのです。

再臨主が降臨され、摂理歴史は責任分担が完結されることで終止符が打たれ、新しい歴史が発しているということを私たちは感じています。蕩滅歴史から本来の創造本然の歴史が始まっていると私たちはもう既に認識しているのです。

ここで紹介されるのは中心民族の歴史です。ですが、周辺諸国の歴史においても、そこには神様の予定と摂理というものがあると思いますので、歴史の法則性は適用されると思います。詳しい歴史の法則性については、統一思想の歴史論で紹介されていますので、関心をもたれましたら、一度読んでみることをお勧めします。

そして、その歴史の法則性は私たちの人生においても適用されるのです。何も人類全体、国家に適用されるだけではないのです。個々の人々の人生においても適用されることを歴史論は紹介します。

皆様が再臨主を迎えるまでの人生という歴史においても、神様の摂理が働いていることを確認されてみてはいかがですか。そのためにも家系図を作ることも大変重要なことだと私は思っています。

【御言】

復帰摂理から見た歴史発展

共生共栄共義主義と共産主義

- ・人間の本心は、共生共栄共義主義を主唱し、神様の創造目的を完成した理想世界をつくるのですが、この世界が、すなわち、再臨されるイエス様を中心とする地上天国なのです。
- ・サタンは、神様の摂理に先立って成就していくので、先に、唯物史観に立脚した、いわゆる科学的社会主義を叫びながら共産主義世界へと進んでいきます。

【感想】

ここで私たちが目指す地上天国と言うものがどのようなものであるのかということが簡単に紹介されています。それが共生共栄共義主義を中心とした神様の創造目的を完成した世界だということです。ですので、私たちがゴールを明確にするには、この創造目的をしっかりと理解しておくことが大切だと思います。そして、その中心にはもちろん再臨のメシヤであられる真の御父母様が立たれるというのは明確だと思います。

そのような地上天国を建設する前に、サタンは神様の摂理に先行してサタン側の地上天国を作り上げるということです。それが共産主義世界だということです。共産主義は唯物史観に立脚し、科学的社会主義を主張しながら、共産主義世界を打ち立てるということです。

そのような現代において、私たちは唯物史観の誤りを明確に指摘しつつ、科学だけでは人間を救うことはできないことを明示して、単に反共産主義を唱えるだけではなく、こうすれば理想的な天国を創建できるという代案としての方法まで提示しているのです。

私たちは統一思想において統一史観というものを学びます。私たちは統一史観に基づいて地上天国が必然的に成就されることを信じています。皆様はいかがですか。まだ統一史観というものを知らないという方は一度、統一思想の歴史論をひもといてみてはいかがでしょうか。

【御言】

・宗教、政治、経済の三つの部面に発展してきた歴史が、一つの理想を実現するためには、宗教と科学とを、完全に統一された一つの課題として解決し得る新しい真理が現れなければなりません。

・このような真理に立脚した宗教によって、全人類が神様の心情に帰一することにより、一つの理念を中心とした経済の基台の上で、創造理想を実現する政治社会がつくられるはずですが、これがすなわち、共生共栄共義主義に立脚した、メシヤ王国なのです。

【感想】

私たちは単に宗教団体として未来社会を論じているのではありません。ここで明確にされているように、宗教理念に立脚して経済活動を行い、きちんとした経済基盤を確立した上で、政治をしっかりと執り行う社会を構築しようとしているのです。つまり、宗教だけで建国ができるとはここでは述べていません。

宗教によって神様の心情に帰一することはとても重要ですが、その理念の上に、経済活動をしっかりと行っているということなのです。そして、その経済の基盤があつてこそ、政治も安定し、その政治をもって理想的な社会が築かれるとここでは述べています。

今も天一国を創建するために皆様も精誠を捧げられていると思いますが、そのような過程において経済摂理が必要になるという理由もここで述べられているように原理的なものなのです。

ただ、これまで経済大国となった日本は、宗教性が乏しい為にお金に翻弄された歴史を刻んだかもしれませんが、そのような日本においても、しっかりと宗教理念が入れば、それは理想的な国家を構築することも可能になるということです。

ですので、経済摂理の前の宗教性なのです。私たちはしっかりとお金に主管されている人生を、本然の主管関係に戻して、その上で、天一国を創建するには経済的な基盤が必要になるということです。その基盤の上に政治が適切に運営されて、天一国は成り立つと、原理が説明しているのです。

宗教だけでは国を建てられないと原理は語っています。これが私たちの天一国創建の道なのではないでしょうか。

【御言】

第5章 メシヤ再降臨準備時代

宗教改革期(1517～1648)

- ・西暦 1517 年、ルターが宗教改革の旗を掲げたときから、1648 年、ウェストファリア条約によって新旧両教徒間の闘争が終わるまでの 130 年の期間をいいます。
- ・中世社会は、封建制度とローマ・カトリックの世俗的な墮落によって、人間の本性が抑圧され、自由な発展を期待することができない時代でした。
- ・ゆえに、中世の人たちは、その環境を打ち破って、創造本性を復帰しようとする方向へ動かざるを得なかったのです。
- ・カイン型のヘレニズムの復古運動は、人本主義の発現である文芸復興を引き起こし、アベル型のヘブライズムの復古運動は、神本主義の復活のための宗教改革を引き起こしました。

【感想】

ここではいよいよメシヤが再降臨するための準備期間にどのようなことが起こったのかを見てゆきます。このメシヤ再降臨準備期間の出発となったのが、ルターの宗教改革なのです。日本にはキリスト教の文化が根付いていませんので、新教と旧教の対立と闘争と言われてもピンとこないかもしれません。ですが、ヨーロッパでは本当に大きな転換点となったのです。

まず、中世の人々の行き詰まり感というのが高まるということです。つまり、自分たちを支配している封建制度とカトリックの世俗化などにより、自由な発展を阻害されているという感覚が高まるということです。その結果、このようなしがらみを打ち破るために、人々は自由を求めて、動き始めたということです。

カイン型の運動は人本主義を発現し、日本でも有名なルネッサンスとして文芸復興を引き起こします。日本ではとても有名なヨーロッパの復古運動だと学びますが、これは人本主義によるカイン型であるということ覚えておきたいと思います。これに対してアベル型の改革が神本主義による宗教改革なのです。きっかけはカトリックの教会が発布した免罪符の問題からだと言いますが、この点は私たちも気をつけておかなければならないと思います。

免罪符の関係で、私たちに関わることは献金すれば、自らの罪が許されるという誤った信仰観ではないかと思います。もちろん、献金によって様々な精誠が捧げられ、摂理にも貢献して、功勞として記録されることは事実です。そして様々な恩恵や贖罪を受けるには感謝献金が必要になるのも事実です。ですが、罪の贖罪というものはお金では解決できる問題ではないのです。きちんとメシヤのための基台を準備して、メシヤを迎えて贖罪を受けないと許されないのが私たちの原罪なのです。それから蕩減条件を立てることで、精誠条件を立てることで罪が許されるというのも事実ですが、何かを買うように蕩減するためにお金を払えばいいとは決して言いません。私たちの心情的な精誠が必要であると指導されるのが一般的だと思います。

そのような信仰観をしっかりと確立しておかないと、教会内部に宗教改革のような風潮が起こってしまうということです。つまりは、もっと自由に信仰をしたいという群れが現れて、復古運動を起こそうということになるのです。

もちろん、私たちは様々な問題があると祈願書を書きます。ですが、これは免罪符ではないことは大母様も明記されています。どこまでも先祖解怨、先祖祝福に導かなければ救われないのが私たちのご先祖様なのです。

皆様は大丈夫ですか？ 自分たちの家庭もどのようにすれば救われるのか、先祖の罪が許されるのかということが明確に理解されていますか？ もし、不明な時にはしっかりと教会で確認された上で、献金摂理に同参されることを私はお勧めしたいと思います。

【御言】

宗教および思想の闘争期(1648～1789)

- ・この期間は、西暦 1648 年ウェストファリア条約によって新教運動が成功して以後、1789 年フランス革命が起こるまでの 140 年期間をいいます。
- ・文芸復興と宗教改革によって近世の人々は、信教と思想の自由から起こる神学および教理の分裂と、哲学の戦いを免れることができなくなりました。
- ・復帰摂理は、カイン、アベルの二つの型の分立摂理であり、歴史の終末にも、この墮落世界は、カイン、アベルの二つの世界に分立されるのです。
- ・カイン型の世界がアベル型の世界に屈伏して初めて、再臨主を迎えるための世界的な「実体基台」が成就されて、一つの世界を復帰するようになります。
- ・そのための二つの型の人生観が確立されなければなりません、カイン、アベルの二つの型の人生観は、この期間に確立されたのでした。

【感想】

日本でも多くの人が宗教から離れる現代において、宗教的な価値観が失われ、人々の思想は様々に分裂するようになりました。人々の考え方が個々人で異なり、お互いを理解するのに共通のベースというものがなくなったことは、現代における個人の孤立という問題を引き起こしているかもしれません。

そのような思想の自由を保障されている日本では、人々の思想は分裂してから様々に成長をして、カイン型の人生観を形成しやすいという傾向にあります。その理由としては宗教的な素地が薄く、宗教改革的な運動は日本では見られず、江戸時代の封建的な支配から解放された人々は、人本主義に流れやすいという傾向を否めないからではないでしょうか。

そのような人生観はカイン型の人生観を形成しやすく、科学万能主義に陥り、唯物的な思想に傾いてゆくという傾向を示すかもしれません。

そのような日本が軌道修正をして、宗教圏である欧米と国交などを持てるようになったのは、まさに真の御父母様による恩恵だと私は思っています。

ですので、信教の自由を明記した日本の憲法は、とても重要なことだと思っています。日本においても宗教の宗派や宗教そのものが違うことを理由に闘争することがないように日本は運営されています。その結果として、日本でも様々な宗教が信仰されるようになり、その宗派も様々になるというのです。

そのような宗教を統合するために、真の御父母様は超宗教的な運動を展開され、根源である神様が唯一であるがゆえに、宗教の目指すものも一つであるということではないかと思っています。

皆様はどのような人生観をお持ちですか？ その人生観も成長するとアベル型かカイン型になるというのです。そして、いずれの人生観もメシヤを迎えるようになるのが終末なのではないでしょうか。

【御言】

政治、経済および思想の成熟期(1789～1918)

- ・1789 年フランス革命が起こってから、1918 年第一次世界大戦が終わるまでの 130 年の期間をいいます。
- ・カイン、アベル二つの型の人生観はそれぞれの方向に従って成熟するようになり、カイン、アベルの二つの世界が形成されていきました。
- ・カイン型の人生観は啓蒙思想を立ててフランス革命を起こし、カイン型の民主主義を形成し、これが体系化されることにより、共産主義世界を形成するに至りました。
- ・アベル型の人生観は清教徒革命を起こし、アベル型の民主主義を実現し、更に、今日の民主主義世界を形成するようになりました。

【感想】

ここでは2つの革命が紹介され、その後、その革命の結実として2つの世界が形成されたことを紹介しています。

フランス革命はアニメや漫画でも舞台になった革命であり、皆様も名前を聞かれているのではと思います。そのフランス革命の原動力となったのが人本主義に立脚した啓蒙思想だということです。宗教という規制からの解放、もっと人間の理性などを重んじようという思想ではありますが、その思想はフランス革命を経て、人々をより一層神様から遠ざける結果となり、その結実として共産主義世界を形成します。

ですので、日本でもこのような人本主義の流れが強いため、真の御父母様が手を差し伸べていなければ日本は共産化されていたといえます。

これと対比して覚えておきたいのが、宗教改革に端を発した清教徒革命というものです。信仰の自由を求めてピューリタンはアメリカ大陸に渡り、彼らの自由に神様を信奉する流れは、従来の規制によって閉ざされていた人々を一層神様に近く導くこととなります。そのような基盤の上で打ち立てられたのが、民主世界なのです。

ですので、欧米の民主主義にはキリスト教に立脚した宗教的背景があるのですが、それが日本に入ってくるときには、キリスト教の背景が抜け落ちて、形だけが入ってきたという危惧もあります。ですので、真の民主主義というものを理解することを求めた人は欧米に渡ったのではないのでしょうか。

日本においてはキリスト教を弾圧した歴史が刻まれています。ですがそのような国家が先進国として世界をリードしているのには、天が母国と認めた経緯があるからだと言われます。

ですので、日本の文化はややもすると人本主義に流れやすく、カイン的な人生観を持ちやすいと言います。皆様はいかがでしょうか。民主主義の精神を理解し、体恤していると言えますでしょうか。

【御言】

世界大戦

原因

- ・世界大戦を、外的な原因である、政治、経済、思想などを中心として見ただけでは、これに対する摂理的な意義を把握することができません。
- ・それでは、蕩滅復帰摂理から見た世界大戦の内的な原因は何なのでしょう。

【感想】

私たちはもう戦争を知らない世代になろうとしています。終戦を終えて、日本は高度に発達したと言いますが、その少し前の世界史を見てみます。

世界大戦は第一次と第二次がありますが、いずれも世界を二分するような形での戦いになっています。では、この戦争が単に国家の利益や欲望のため、領土拡大などの侵略のために勃発したのかというとそうではないということです。この大戦が勃発した理由には摂理的な理由があるということです。

ですので、これまでの世界史が見てきた当時の国際情勢、政治的な背景、経済的な様相などだけでは本来、世界大戦は語れないということです。

では、その摂理的な理由とは何なのでしょう。それは次回に紹介しますが、ここでは単なる歴史学の繰り返しではなく、神様が誘導された世界大戦の意図というものを紹介します。この流れからすると、世界大戦は偶然に起こったのではなくて、起こるべくして起こったという側面が見えてきます。

このような世界大戦を終結させて、神様の願われる理想的な平和世界を構築することを摂理は目指しています。そして、この原理では一般に知られていない第三次の世界大戦についても述べ

られています。歴史には登場しませんが、第三次の世界大戦は存在したのです。そのような新しい真理をひも解きながら、私たちはなぜ戦争が起きるのかという理由を悟ってゆくべきではないかと思っています。

【御言】

内的な原因は？

- ・第一に、主権を奪われまいとするサタンの最後の発悪によって
- ・第二に、サタンが先に非原理的につくってきた三大祝福を復帰する世界的な蕩滅条件を立てるために
- ・第三に、イエス様の三大試練を世界的に越えるために
- ・第四に、主権復帰のための世界的な蕩滅条件を立てるために、世界大戦が起こるようになります。

【感想】

ここで世界大戦が勃発した政治的な理由でもなく、経済的な理由でもなく、神様から見た摂理的な理由が紹介されています。

この世界大戦を通じて、サタンはその主権を神側に提供したのです。ですので、サタンは人類に対して持っていた主権を神様の側に渡し、そこから新しい神様を主権とする世界が広がり始めたというのです。それであるがゆえに、世界大戦後、キリスト教国家が世界をリードするようになり、中心宗教が世界を主管するようになったというのは歴史を見ればお分かりになると思います。

そして、とても大切なことは、神様が建設される創造理想世界を実現する前にサタンは非原理的にその世界を築くということなのです。このようなことを私たちはサタン先行説ということで理解します。ですので、神様の摂理を進めるにおいても、サタンが先行して非原理型の理想を実現するために、今、どのような非原理的な世界が展開されているのかということを見ることで、神様の理想世界がどのようになされてゆくのかということも見えるのです。

そして、三大祝福に対応して三大試練があったように、この三大試練を世界的に超えるということと考えれば世界大戦は三次に渡って起こっていたということが明白なのです。

このような世界大戦を通じて、世界はキリスト教が主権を持ち、世界をリードするようになります。もしキリスト教が御父母様を受け入れていたら、世界はキリスト教を中心宗教として、全世界を理想的な天国に作り変えていたことでしょう。ですが、中心宗教も、二次ではなく、三次の家庭連合まで延長され、第三イスラエルと呼ばれる私たち教会員のもとに継承されるようになり、今も摂理を担っています。

このような摂理的な理由が見えてくると、これから神様の理想世界に向かう歴史において、世界大戦はもう存在しないであろうということも言えてくると思います。なぜ世界大戦が起こったのか。単に戦争に巻き込まれた当事者という立場ではなく、神様の目から見た、人類に世界大戦が必要な理由と言うのを御父母様は解明されたのです。

サタンは主権を奪われまいとすると戦争を起こすこともあるというのです。ですので、戦争があったとしたら、サタンが主権を神側に渡す過渡的な現象だと私の目には見えることがあります。

【御言】

復帰摂理から見た第一次世界大戦の結果

- ・第一次世界大戦で天の側（神様のみ旨と同じ方向を取る国）が勝利することにより、再臨主の誕生される基台が造成され、再臨摂理の蘇生期が始まった。

【感想】

復帰摂理は蘇生期、長成期、完成期をもって完結されます。その蘇生期を第一次大戦は担っていたということです。神様の三大祝福から見ると、第一祝福の復帰を意味します。三大試練から見

ると、まさに石をパンに変えてみよという試練に相当し、御言が語られる基台が誕生することを意味します。

そのような意味において、第一次大戦の結果をもって、真のお父様が地上に誕生されます。再臨主が誕生できる基台がこの第一次大戦で成された結実なのです。

ですので、真のお父様は世界的な蕩滅条件の上に誕生されているということです。決して、普通の家庭の営みで誕生されているのではないというのがここでも分かります。

地上で見れば全世界が、歴史を見れば 6000 年の人類歴史が結実して誕生されたのが真のお父様だということです。その価値というものを私たちはどれほど貴重視しているのかということも、私たちの信仰と関わってきます。

その価値を知らない世間のマスコミは御父母様を自分たちの凡人と同列に見たり、あるいは韓国人と見下したことがあったのです。

ここで紹介されているように、真のお父様は横的には世界的な蕩滅条件によって、縦的には 6000 年の歴史的な蕩滅条件によって基台が準備されて誕生されているのです。

【御言】

復帰摂理から見た第二次世界大戦の結果

・第二次世界大戦が天の側の勝利に終わったので、再臨主を中心として、新しい天と新しい地を建設するときになり、再臨摂理の長成期に入るようになりました。

【感想】

第二次世界大戦においてサタン側のエバ国家となったのが日本です。それであるがゆえに、この世界大戦についてあまり語られないこともあるのですが、よくよく覚えておいて欲しいのですが、日本の敗戦によって摂理は進んだのです。ですので、世界大戦における日本の敗戦は神様の予定であり、それによって世界は大きく神様の側に傾いてゆくことになります。

第二次大戦においては、第二祝福を復帰する形になりますので、子女がどんどんと繁殖する形になります。その象徴として、戦勝国家は植民地を奪うのではなく、支配されていた植民地を解放し、独立させて、多くの国家が新しく誕生したといえます。

このように第二次世界大戦も神様の側の勝利に終わります。これによって世界は再臨主を中心とした新天地の建設の時代に入ります。

ですが、この摂理において、時の中心人物が責任を果たすことができずに、人類は天国建設の絶好の機会を失うことになります。

第二次世界大戦の結果は日本にしてみれば敗戦の経験になりますが、神様の摂理から見れば、再臨摂理の長成期に入るという喜ばしい結果だったのです。

【御言】

第三次世界大戦は必然的に起こるのであろうか

・人類歴史の終末には、サタン側も天の側もみな世界を主管するところまで行かなければならないので、民主と共産の二つの世界が両立するようになります。

・この二つの世界の最終的な分立と統合のために世界大戦が起こるようになります。第一次、第二次の大戦は、分立するための戦いであり、第三次の大戦は、統一するために、必ずなければなりません。

・その戦いには二つの道があります。第一は、武器でサタンを屈伏させることであり、第二は、理念による内的な戦いです。この中で、いずれの道を選ぶかは、人間の責任分担の遂行いかんによって決定される問題です。

【感想】

歴史を学ぶとき、第三次世界大戦という言葉は出てこないかもしれません。では、第三次世界大戦は起こらなかったのでしょうか。原理はそんなことはないと言います。ただ、武器を持って行われる戦争ではなかったということです。

世界の近代史を見れば、世界は民主世界と共産世界に二分され対立していた時代を記録しています。それはアメリカとソ連の冷戦に象徴されるように、ある意味、武器開発の競争と言う戦争かもしれませんし、また、理念の戦争でもあったのではないかと思います。

オリンピックはどちらの理念が優れているのかということを誇示する場にもなったのかもしれません。このように世界は民主と共産の理念の戦いに入っていたということを歴史は記録していると思います。これを原理は第三次世界大戦と呼びます。

ややもすると、当時の核開発などにより、第三次世界大戦は核戦争になるというSF的な危機感もあったのですが、そのような危機は回避され、冷戦は再臨主の懸命の働きによって終結することになります。

ですので、私たちは、理念による混沌を経験したかもしれませんが、暴力的な戦争は経験をせずにすんだということです。このような武器による戦争を回避し、理念による闘争で人類は第三次の世界大戦を終結させたことは大きな福音だと思います。

あまり知られていませんが、第三次世界大戦は起こったのです。そして、それは必然的に起こるべきであったということです。ですので、多くの識者はその危機になんとかしなければ、様々に動いたことも歴史は記録しているのです。

【御言】

復帰摂理から見た第三次世界大戦の結果

・神様は、復帰摂理の最終的摂理である三次の大戦に勝利することによって、復帰摂理のすべての基台を完全に蕩滅復帰して、創造本然の理想世界を実現していくようになるのです。

【感想】

かつての冷戦の結果においてもソ連邦が崩壊し、共産主義が倒れて、信教の自由が認められるようになりました。このアメリカの冷戦における決定的な勝利に御父母様が深く関与されたことは摂理歴史に記録されています。

このように今の時代は既に第三次の世界大戦も終了し、復帰摂理の全ての基台が整い、後天時代を迎えているという状況なのです。

そして、霊界においては、神様の祖国である天一国が出発しており、地上においても霊界の天一国が定着する時を待っているという時代なのです。

ですので、終末期を今は終えて、創造本然の理想世界を構築しようという時代に今は向かっています。

ですが、世の中を見るとまだまだ世界情勢はとても天国とはいえない、平和を謳歌できる時代にはなっていないという人もいます。ですが、霊界と地上世界、無形世界と有形世界が主体と対象、原因と結果の関係にあるとするならば、地上に天一国が実体化するのは時間の問題だと思います。

そのような中、私たちは霊的には天一国に入籍しており、その恩恵圏内において地上の生活を送っているということです。

日本においてもこれからのビジョンというものが問われるのですが、創造本然の世界と言う創造原理的な概念がなければ今の時代はそのようなビジョンも描けないということではないでしょうか。

ですので、皆様、安心してください。第三次の世界大戦はもう既に神様側の勝利に終わっているのです。そして、今、世界は神様の願われる創造理想の世界に向かっているということです。その時代の流れに乗ることが、これからの私たちの人生において、幸福と大きく関わってくると思

います。

【御言】

第6章 再臨論

- ・イエス様は、再臨するということを明確に言われました。しかし、その日とそのときは、だれも知らないといわれました(マタイ24:36)。
- ・アモス書3章7節のみ言をみると、神様は、イエス様の再臨に関する秘密を、必ず、ある預言者に知らせてから摂理されます。
- ・したがって、光の中にいるすべての信徒たちを通じて、必ず啓示してくださることは明らかです。

【感想】

多くのクリスチャンがイエス様の再臨を待っていました。ですが、聖書にはイエス様がいつ、どこに再臨されるのかということを述べていないという聖句があるのです。そして、日本においては、まさか韓国に再臨主が来るとは思ってもみなかったというのです。いえ、キリスト教の素地もありませんでしたので、再臨主という言葉や概念すら知らないのかもしれないかもしれません。

そのような中、原理は、イエス様の再臨がいつ、どこに訪れるのかを理論的に示しています。なぜそのようなことができるのでしょうか。それが、やはり聖書の別の聖句によるというのです。

真のお父様は聖書を何度も深く読まれながら、神様の摂理というものが、必ず何らかの秘密を示されてから展開されているということを解明されたのです。それは、これまでお話した、イエス様の路程の前にヤコブやモーセの路程を示されたようにです。

私たちは御父母様が再臨主であることを明確に受け入れています。ただ、人々になぜですかと説明を求められたときに、抽象的な感想だけで語るのではなく、原理でしっかりと理論的に説明できることを覚えておかれるといいのではないかと思います。

再臨論が明確に分かると、御父母様が単なる偉人ではないことがはっきりと分かります。神様の摂理を完結されるために降臨されたメシヤという方が、まさに御父母様であるという確信をさらに深めることができるのが、この再臨論だと私は思っています。

【御言】

イエス様はいつ再臨されるか

- ・イエス様が再臨されるときのことを、終末といいます。ところで、現代が終末であるということに関しては、既に人類歴史の終末論において明らかにしました。したがって、現代がとりもなおさず、イエス様の再臨なさるときであり、
- ・第一次世界大戦が終了したあとから再臨期が始まったのです。

【感想】

イエス様はいつ再臨されるのでしょうか。私たちは、御父母様を再臨のメシヤ、再臨主として受け入れています。では、なぜ、今、御父母様が再臨されたのでしょうか。それが、現代が終末であるからなのです。

終末論において、現代がとりもなおさず終末であることは説明されたことだと思います。特に第一次世界大戦が神様側の勝利に終わったことから、再臨期は始まったというのです。

ですが、多くの人々は、今が再臨主が来られる時であることを知らず、また神様の摂理がどのようなものであるのかも知らずに生きているというのです。私もそうでした。世界における危機感は持っていました、まさか、今の時代に再臨主が来られているということなどは全く知りませんでした。

そのような人々に私たちは、今の現代が終末であり、今こそ、再臨主が降臨される時代であることを伝えるべきなのです。

現代が終末であることは終末論をひもとくと明確だと思います。終末においてどのような現象が

起きるのかもある程度分かります。

再臨主が降臨された現代において、過去の罪惡歴史が終結し、新しい創造理想世界が始まっているということです。イエス様が再臨される時、それが今なのです。

【御言】

イエス様はいかに再臨されるか

- ・我々は、イエス様が雲に乗って来られると断定する立場から聖書を読んできました(マタイ 24:30～31)。
- ・もしイエス様が、雲に乗って、天から再臨されるとするならば、信奉しない人はいないはずです。
- ・一方、ルカ福音書 17 章 24 節～25 節を見ると、イエス様は再臨されるときに、多くの苦しみを受け、この時代の人々に捨てられねばならないと言われました。
- ・イエス様が地上で誕生されるなら、異端者として追われ、苦しみを受けることが予想されたので、この時代の人々から捨てられなければならないと言われたのでした。
- ・さらに、ルカ福音書 18 章 8 節には、イエス様が、「人の子が来るときに、地上に信仰が見られるであろうか」と言われたみ言もあります。
- ・それゆえに、イエス様の再臨は、地上で肉身をもって誕生されることによってなされます。

【感想】

多くのクリスチャンはイエス様は雲に乗ってやって来られると信じていました。それで、空ばかりを眺めて、自分たちが天に引き上げられて救われることを祈っているということです。

もし、イエス様が天から下りてこられたとしたら、それも雲に乗ってこられたとしたら、誰が信じないでしょうか。まさに自分たちの信じていた通りだと、自らの信仰を確信し、イエス様に駆け寄ったに違いありません。

だとしたら、どうして再臨されるイエス様はこの世の人々に捨てられなければならないという聖句があるのでしょうか。この謎が解けないということです。

ですが、現実はどうでしょうか。再臨のメシヤであられる御父母様は雲に乗って下りてこられたのではなく、女性の胎中から肉身を持って誕生されたのです。

つまり、クリスチャンは自分たちの信じていた雲に乗ってやって来るとい信仰と地上に肉身をもって誕生されたという現実のどちらかを選択しなければならなくなったのです。そして、多くのクリスチャンが従来の信仰を否定することができず、結果として、再臨主である御父母様を異端者として迫害したのでした。

ですので、ここでのポイントは、再臨主は女性の胎中から肉身を持って誕生されるということなのです。ですので、決して SF のように宇宙人によって地球の文明がもたらされたというようなことはないのです。

私に幸いしたのは、そのような再臨主が雲に乗ってやって来るとい信仰を持っていなかったことでした。ですので、否定する信仰が無かったために事実だけをすんなりと受け入れることができたということです。これが、イエス様が降臨された当時、ユダヤ教徒ではなく異邦人にキリスト教が広まった同時性なのかなと感じることもあります。

【御言】

イエス様はどこに再臨されるか

- ・黙示録 7 章 4 節(マタイ 10:23、マタイ 16:28)などを根拠として、イエス様がユダヤ民族の内に再臨されるのだと信じている信徒たちが多くいます。
- ・しかし、マタイ福音書 21 章 33 節～43 節によると、イエス様はユダヤ民族には再臨されないばかりでなく、その遺業までも、再臨のために実を結ぶ他の国と民族に与えると、明らかに言われました。

・イエス様が十字架で亡くなられてからのちのイスラエル選民は、アブラハムの血統的な子孫ではなく、アブラハムの信仰を継承した、キリスト教徒たちです。

【感想】

イスラエル選民という言葉聞いたことがありますか？ かつてはユダヤ民族がそうであり、ユダヤ民族がイエス様を迎えることができずに、その遺業までもクリスチャンに継承され、第二イスラエル選民となったキリスト教徒。そして、そのクリスチャンも真の御父母様を受け入れることができず、また異邦人と呼ばれた私たちが第三イスラエル選民となっているのです。

選民とは選ばれたエリートのことではありません。ましてや人類を支配する少数の選ばれた民と言うわけでもありません。ただ、神様が送られるメシヤを助け、守り、支える民として選ばれただけなのです。ですので、特殊な能力があったり、特殊な知識があったりするわけではないのです。

ただ、神様の導きにより様々な悟りを得、愛情ゆえに豊かになることはあるかもしれません。本来は韓国の国がイスラエルの使命を継承することになっていました。ですが、韓国も様々な中傷などで御父母様を迫害しましたので、そのことゆえにメシヤを迎える民としての位置を失ってしまったのです。その中で御父母様を受け入れた家庭連合の食口たちが、その使命を継承しているのです。

これからも分かります。迫害した国家はメシヤを迎える位置を失ってしまうのです。それゆえに、日本も何度もエバ国家としての位置を失いかけているのですが、何度も許されて、その位置を守っているという状況だと思います。

ですので、血統的な子孫がイスラエルの使命を継承するのではないのです。メシヤを受け入れることができなければ、信仰を継承した異邦人に継承されるというのです。この判断はイスラム教におけるシーア派とスンニ派のどちらが本流かという指標にもなると思います。

【御言】

イエス様は東の国に再臨

・黙示録 7 章 2 節～4 節を見ると、日の出る方、すなわち東の方から天使が上がってきて、最後の審判において選ばれた者である 14 万 4 千の群れに印を押されると言われました。

・黙示録 14 章 1 節を見ると、再臨されるイエス様は、選ばれた 14 万 4 千の群れの額に、子羊と父の印を押される言われました。

・したがって、神様の遺業を受け継いで、イエス様の再臨のための実を結ぶ国は東方にあるということが分かります。

【感想】

東の方とはどういうことでしょうか。これは東洋を意味するということなのです。聖書の黙示録に再臨されるイエス様は東洋に来られるということが書かれているというのです。

これまでのキリスト教の主流はヨーロッパ、アメリカであったかもしれませんが。それであるがゆえに再臨主は欧米諸国のどこかに誕生されると普通のクリスチャンは思われるかもしれません。ですが、真の御父母様は東洋に誕生されたのです。

ですので、東洋の小さな国に誕生された御父母様がまさか救世主であろうはずがないと思ってしまふのが、キリスト教のある意味、常識なのかもしれません。

ですが、そのようないわれのない迫害までも受けられ、世界を救おうと歩まれた御父母様を受け入れたのが、家庭連合の信徒なのです。

14 万 4 千の選ばれた民には額に印が押されているというのです。それは決して肉眼では見えるものではありません。また科学的な検査で分かるというものでもないでしょう。ですが、真の御父母様の愛された、本当の孝子孝女の額には私も目に見えない印が押されていると思います。

ただ、選ばれたことが栄光であり、高い地位を得るとか、そういうことではないと私は思っています。ただ、神様によって先駆けて愛されたということではないのでしょうか。予定論でも紹介しましたが、ど

んなに立派な素養を持っていたとしても与えられた責任を果たすことができれば、神様も栄光の場に人間を立てることはできないのです。

ただ、特権を与えられるかのように選ばれるのではないのです。神様の直接主管圏に先駆けて入るというだけのことではないでしょうか。選ばれた14万4千人とは。そして、再臨主に記憶される14万4千人ではないかと私は思っています。

【御言】

東方のその国はすなわち韓国

- ・古くから、東方の国とは韓国、日本、中国の東洋三国をいいます。
- ・日本は全体主義国家として、再臨期に当たっており、その当時、韓国のキリスト教を過酷に迫害したサタン側の国家でした。
- ・中国は共産化した、サタン側の国家です。
- ・したがって、イエス様が再臨される東方のその国は、すなわち韓国なのです。

【感想】

前回の内容で再臨主は東方の国に降臨されるということを紹介しました。では、その東方の国とはどの国なのかということを見てゆきます。

古くから東方の国とは韓国、日本、中国の東洋三国をいいます。これは世界史を学ばれていれば、どなたも納得できると思います。東洋の歴史を見れば、中国を日本ではよく学びますが、近年の韓流ブームで韓国の歴史も古いものがあることを理解するようになりました。その三国にしばらくされた中でも韓国が再臨主が来られる国だということです。

再臨期の状況を見てみれば、日本はサタン側のエバ国家として全体主義を主唱し、カイン型の世界を形成していました。中国は共産化したのを見ても明らかにサタン側です。そのようなことで、残った国が韓国と言う少し帰納的な結論になっています。

御父母様がなぜ韓国人なのかという理由もこのように摂理的に説明できるということです。ある人は、なぜ日本に再臨主は誕生されなかったのですかと質問される方もいるかもしれませんが。そのような方にきちんと説明できるのがこの部分ではないかと思います。

ですので、自分が再臨主だという日本人がいたとしても、それは原理を知らない人だということです。日本は外国のものを真似て、日本流に作り変えてしまう風土もありますけど、再臨主を真似ることは決してできません。再臨主は日本には誕生しません。これは明確な真理なのです。どんなに日本人を誇ったとしてもです。

【御言】

メシヤが降臨される国が備えるべき条件

① 神の心情の対象

- ・メシヤが降臨される国は、次のような条件を備えなければなりません。
- ・神様の心情の対象となるためには、まず、血と汗と涙の道を歩まなければなりません。ゆえに韓国民族が歩んできた悲惨な歴史路程は、神様の選民として歩まなければならない苦難の道でした。
- ・その民族は、善なる民族でなければならず、韓国民族は単一血統の民族として、一度も他の国を侵略したことはありませんでした。
- ・韓国民族は先天的に宗教的天稟をもっていて、敬天思想が強く、忠・孝・烈を崇敬する民族性をもっています。

【感想】

メシヤが降臨される国家の備えるべき条件というものがあるのです。第一に神様は栄光の神様ではなく悲しみと苦難の神様であるがゆえに、その対象となろうとすれば、その対象も苦難と悲しみ

を経験しなければならないということなのです。

韓国の歴史をひも解いてみれば本当に日帝時代などの侵略を受け、様々な苦労を経験されていたことを知ることができます。私たちの信仰生活においても、様々な苦労があり、悲しみがあると思います。そのような涙を流し、苦労した汗を流すことで私たちは神様の対象の位置に立てるというのです。

ですので、私たちの道は安楽な幸福を求める道ではなく、苦難の歴史の上にあるがゆえに、苦難を克服する道になるのです。それも、神様の対象となるためなのです。

そして、韓国は他国を侵略したことがないというのです。韓半島の歴史を見れば、韓半島は北方に侵略することもなく、また蒙古のように日本を侵略したこともありません。その点において単一民族でありながら善なる民族だというのです。

そして、沈情伝、春香伝に見られるように、忠、孝、烈の心情をととても愛する民族性があり、敬天思想があるというのです。

日本の歴史を見てみると、仏教は伝来しますが、宗教は八百万の神であり、敬天思想がほとんど無かったといっても過言ではないというのです。

このような特性を韓国の歴史は持っているというのです。ですが、近代においては、御父母様を受け入れることができず、韓国の伝統文化も崩れてきているというニュースも聞きます。そのようなこともよく理解したうえで主の国、韓国を敬いたいと私は思っています。

【御言】

② 預言者の証拠

- ・韓国民族は、この地に義の王が現れて千年王国を建設し、世界万邦の朝貢を受けるようになるという、鄭鑑録信仰によるメシヤ思想があります。
- ・韓国民族が信じている各宗教の開祖が、韓国に再臨するという啓示を受けています。
- ・イエス様の韓国再臨に関する霊通人たちの神霊の働きが雨後の竹の子のように起こっており、
- ・主の韓国再臨に関する明確な啓示を受けています。

【感想】

預言と言うと予言と勘違いされている方もいるかもしれませんが、ノストラダムスの予言と言うようなものではありません。預言とは神様が人間に預けた言葉なのです。敬天思想の豊かな韓国では神様からのお告げというものを本当に大切にし、国家の重要な決定において神官の言葉が大きな影響力を持っていたという歴史があります。そのような預言の中に鄭鑑録があり、義の王とありますが、まさしく平和の王として推戴された御父母様が義の王だと私たちには分かります。

そのような預言のある中で、現代においても、イエス様の再臨が韓国に起こるということを多くの霊通人が啓示を受けるように、中には自分こそはイエス様の再臨であると聖書にある偽キリストのごとく振舞いつつ、落ちていった人も多いというのです。そのような中、明確に韓国に再臨主が降臨するという啓示を受けた霊的集団もあり、そのような混乱を收拾することも摂理の一環としてあります。

日本においては、神様から言葉を賜るという考えが歴史的にありません。八百万の神様の前に自分の幸福と健康を祈るのが精いっぱいだったというのではないのでしょうか。アメリカにおいては重要な決定をするときには神様に祈る場所もあると言います。

日本の政治においては政教分離ということが取られている以上、国家の重要な決定に神様の意志が反映されることが少ないというのが、大きな問題点でもあり、ややもすると人本主義に流れてしまう危険性を含んでいると私たちは危惧しています。

では、皆様はいかがでしょう。復帰されるまでにイエス様が韓国に再臨されるという預言を聞いたことがありますか。私もそうですが全くないというのです。むしろ、韓国を見下し、蔑視までの風潮も歴史は刻んだというのです。これが、大きな妨げになることもあります。

【御言】

言語統一の必然性

- ・人間が墮落しないで完成し、神様をかしらに頂き、一つの体のような大家族世界をつくったならば、この地球上で互いに通じ合わない言語が生ずるはずはなかったのです。
- ・再臨の主を父母として頂く、大家族による理想世界は、当然言語は統一されなければなりません。
- ・イエス様が韓国に再臨されることが事実であるならば、韓国語はすなわち、祖国語となるであろうし、
- ・すべての人類は、一つの言語を用いる一つの民族となって、一つの世界をつくりあげるようになるのです。

【感想】

真の御父母様は韓国で誕生され、もちろん韓国語を話されます。ですので、真の御父母様の御言は基本が韓国語です。有名な御言はもちろん世界各国の言葉に翻訳されますが、その真意を訳しきれるのかと言うとやはり限界があります。ですので、真の御父母様の御言を真剣に学べば学ぶほど、原語で読まなければならないことが分かります。

まだ、世界の言葉に翻訳されていない御言も多数あります。御父母様の説教集の御言選集においても韓国語です。それであるがゆえに、真の御父母様の心情を心から相続することを願う人は、韓国語を勉強せざるを得なくなるということになります。

また、韓国語は世界中の食口の共通語になります。アメリカの食口も韓国語を学び、アフリカの食口も韓国語を学び、ヨーロッパや南米の食口も韓国語を学び、流暢に扱えるとするならば、世界中の食口が韓国語で意思疎通ができるようになるということです。ですので、英語ではなく、韓国語で世界中を巡ることが可能になるということになります。

ですので、単に御父母様が韓国人だからという理由だけで韓国語を学ぶのではないのです。御父母様が人類の父母であるから、そして、その父母の心情を心から体恤したいから、また、体恤した心情を世界中の食口と分かちあいたいから私たちは韓国語を学んでいます。

私たちは日本に生まれています。日本語が通じるのは世界でも日本の中だけかもしれません。だとしたら世界で通用する人材になるためには英語が必須だとこの世では言っています。そして、家庭連合員として世界に出るのであれば、韓国語は必須なのです。

皆様はいかがでしょう。天国の言語は一つです。それが御父母様の話される韓国語だとしたら、それを体恤しなければ、私たちは天国でおしになってしまうということもあるのです。もちろん、言葉を用いなくても通じる世界はありますが、会話を楽しめないのは本当に辛いと思いませんか。

ですので、皆様も時間を見つけて韓国語を学ばれることを私もお勧めします。御父母様の御言を韓国語の原語で理解することは、日本語訳をあれこれと考えるよりはるかに恩恵があることを私は感じています。